

平成30年度 文部科学省委託事業

「高等学校における次世代の学習ニーズを踏まえた指導の充実事業」報告書（第1年次）

定時制高等学校における日本語指導を必要とする生徒への支援体制の構築

（個に応じた日本語指導の充実に向けた学校の教育力の向上）

千葉県立生浜高等学校・千葉県立市川工業高等学校

平成31年3月

千葉県教育委員会

目次

はじめに

千葉県教育委員会	1
千葉県立市川工業高等学校長	2

第1章 本事業の取組計画

1 事業計画	3
2 調査研究校の概要	9
3 調査研究計画	11

第2章 平成30年度の取組報告

1 各学校における日本語指導を必要とする生徒に対する指導の現状把握	12
2 教員の見立て力向上のためのツール作成	23
3 高校生が興味・関心をもって学べる日本語指導教材の開発	29
4 各教科の授業における指導の充実	32
5 多文化理解教育の充実	37
6 専門家による研修会の実施	40
7 他都県の先進的な取組の視察報告	46
8 次世代の学習ニーズを踏まえた指導の充実事業検討会議	51

第3章 まとめ

添付資料1 外国につながる生徒についてのアンケート

添付資料2 生徒へのアンケート（学校生活と日本語学習）

添付資料3 生徒へのアンケート（定通総合文化大会後）

添付資料4 生徒へのアンケート（日本語基礎の授業）

はじめに

現在、社会や経済状況の変化に伴う生徒の多様化が進む中、多様な学習スタイルで学ぶことができる定時制高校は、従来の勤労青年の学びの場としての役割はもちろん、多様な学びのニーズへの受け皿としての役割も担っています。特に、自分のペースで学ぶことができる定時制高校は、不登校・中途退学経験者等への学び直しの機会の提供など、困難を抱える生徒の自立支援等の面でも大きく期待されております。

本県では、平成27年度から31年度までの第2期千葉県教育振興基本計画「新 みんなで取り組む『教育立県ちば』プラン」において、学び直しなどの再チャレンジに対する支援として、定時制高校においては定通併修制度を活用した早期卒業の機会の充実や、単位制の特性を生かした教育内容の充実を推進しております。また、自分のライフスタイルに応じて学ぶことができる多部制定時制高校においては、地域の状況を踏まえた生徒の多様な学習ニーズへの対応も進めております。

本事業の調査研究校である千葉県立生浜高等学校は普通科の三部制定時制高校であり、日本語の運用力向上を目指した学校設定科目「日本語基礎」や英語の高度な運用力の向上を目指した学校設定科目「アドバンスト英語Ⅰ、Ⅱ」の開設、日本語基礎を履修した生徒がチューターとして後輩をサポートするプログラム等を導入するなど、日本語指導を必要とする生徒に対してきめ細かな指導を行っております。また、工業科（機械電気科、建築科）をもつ定時制高校である千葉県立市川工業高等学校では、平成22年度から外国人の特別入学者選抜を実施し、入学した生徒に対して日本語指導や日本文化等に関する指導を行っております。

平成31年度千葉県公立高等学校入学者選抜では、外国人の特別入学者選抜が県内の全日制高校12校、定時制高校4校で実施され、日本語指導を必要とする生徒の在籍数は今後ますます増加すると予想されます。

このような状況の中、本県では外国人児童生徒の日本語指導担当者連絡協議会を開催するとともに、外国人児童・生徒等の母語を理解する者を外国人児童生徒等教育相談員として派遣するなどの対応を行っていますが、日本語指導を必要とする生徒への指導に関しては、在籍する生徒の実態に応じた各校の取組が重要となります。

本事業は、定時制高校における日本語指導を必要とする生徒への支援体制を構築し、個に応じた日本語指導の充実に向けた学校の教育力の向上を図ることを目的としております。本事業の成果が、各学校で日本語指導を必要とする生徒に向き合う先生方の一助となることを期待します。

千葉県教育委員会

はじめに

今日ますます社会の国際化が進み、我が国の高等学校で学ぶ外国人生徒の数も増加している。本校定時制課程でも、「外国人の特別入学者選抜」を実施しており、一定数の外国人生徒が学んでいる。これらの生徒が、入学後意欲的に学習活動に取り組み、安心して学校生活を続けられるようにするためには、様々な支援が必要であるが、なかでも日本語指導は欠かすことができないものといえよう。

本校では、これまで学校設定科目「日本語講座」を設定して日本語指導を必要とする生徒の支援に取り組み、また、「外国人児童生徒等教育相談員」「日本語指導員」を派遣していただき、外国人生徒への支援を行ってきたところである。しかし、個々の授業の場での日本語指導が必要な生徒に対する具体的な指導法については、それぞれの職員が手探りで対応しているのが実情である。

今回、県立生浜高等学校とともにこの事業に取り組む機会をいただき、喫緊の課題である日本語指導を必要とする生徒の指導の充実に向けて、調査研究を進めることは大変有意義なことであり、各地で日本語指導を必要とする生徒の指導にあたっている先生方にヒントを与えることができれば幸いである。

最後に、この事業の実施に際して、千葉大学名誉教授 新倉涼子先生に御指導御助言をいただいていることに感謝申し上げるしだいである。

千葉県立市川工業高等学校
校長 野 崎 一 哉

第1章 本事業の取組計画

1 事業計画

(1) 調査研究課題名

定時制高等学校における日本語指導を必要とする生徒への支援体制の構築
(個に応じた日本語指導の充実に向けた学校の教育力の向上)

(2) 調査研究のねらい

多様性や国際化が進展する中で、外国につながる生徒が日本の高等学校で教育を受けることが増加している。特に定時制高等学校では、学習を進めていく上で日本語の運用能力が不足していたり、母語の運用能力が不十分であったりすることで、基礎学力の獲得が困難な生徒が在籍していることが多い。

そこで、日本語指導を必要とする生徒にそれぞれの日本語能力に応じた適切な学びを提供し、自己肯定感や学習意欲を向上させるとともに、日本語能力及び基礎学力を確実に定着させるための研究を行い、その成果を広く活用する。

特に、『見立て→指導計画→指導→反省』のサイクルを確立させることで、日本語指導を必要とする生徒への個に応じた指導を充実させるとともに、学校の教育力向上を目指す。

(3) 調査研究の内容

定時制高等学校における日本語指導を必要とする生徒への支援体制を構築することを目的とし、以下の内容について調査研究を行う。

- ア 日本語指導を必要とする生徒に対する指導の現状把握
(アは研究開始時に新たに加わった項目である。)
- イ 教員の見立て力向上のためのツール作成
- ウ 個別の指導計画のモデル化
- エ 高校生が興味・関心をもって学べる日本語指導教材の開発
- オ 各教科の授業における指導の充実
- カ 多文化理解教育の充実
- キ 専門家による研修会の実施
- ク 教育課程の検討

(4) 調査研究の具体的内容

ア 日本語指導を必要とする生徒に対する指導の現状把握

本事業を始めるにあたり、指導助言者から「生徒一人一人の実態を多角的視点から見極めた上で支援の在り方を模索していくことが重要であり、そのためには日本語指導を必要とする生徒や指導にあたる教員の現状把握を行い、課題をより明確にする必要がある。」との助言をいただいた。

そこで、事前に計画していなかった内容ではあるが、各学校の教員を対象とした

アンケート調査を実施することとした。

イ 教員の見立て力向上のためのツール作成

日本語指導を必要とする生徒への指導を充実させるには、個々の生徒の日本語能力や基礎学力、家庭環境、日本での生活歴、来日前の現地での教育環境等を適切に把握しておくことが重要である。これまでも担任による面接等を通して見立てを行ってきたが、日本語指導を必要とする生徒への指導経験年数が短い教員の中には、十分な見立てができていない状況も見られる。

そこで、個々の生徒の状況を適切に把握するため、見立て力向上のためのツールとして「見立てシート」を作成するとともに、研究実践校で活用方法に関する研究を行う。「見立てシート」は年度当初に活用するものと、年度途中で活用するものの複数のパターンを作成する。

ウ 個別の指導計画のモデル化

日本語指導を必要とする生徒の指導については、個に応じた指導が求められるが、現状では、組織的かつ系統的な指導ができていない状況も見られる。個別の指導計画は生徒の数だけ存在するが、すべての生徒に対応することは難しい。

そこで、作成した「見立てシート」を活用して生徒を大まかに分類し、数種類のモデルケースを作成する。

エ 高校生が興味・関心をもって学べる日本語指導教材の開発

小中学生用の教材や一般に日本語学校で活用されている教材を活用した日本語指導では、学ぶことに対する意欲が必ずしも高くない生徒にとって、日本語学習に対する興味・関心を高めるものになっていないという現状がある。このような問題を解決するため、社会に出て必要とされる題材等を活用して、個に応じた日本語指導を行う必要がある。

そこで、作成した「見立てシート」を活用して、各生徒が興味・関心を持つ題材をテーマにした教材開発を行う。

オ 各教科の授業における指導の充実

これまで、各教科の授業内での指導は各担当の創意工夫で行ってきたが、中途退学する生徒も少なくなく、学校全体で指導方法等を検討していく必要がある。

そこで、ルビやフリガナを使用したワークシートの標準化を行うとともに、日本語能力に応じたワークシートの作成方法等をマニュアル化する。

また、主体的・対話的で深い学びを実現するため、日本人と日本語指導を必要とする生徒が混在する教室内での発問方法やペアリングの方法、テーマ設定方法等についても検討する。

カ 多文化理解教育の充実

各学校では、日本語指導が必要な生徒同士のみでコミュニティを作り、日本人生

徒とのコミュニケーションを十分とれない状況も見られるため、各教科の授業や学校行事、特別活動等を通して、学校全体として多文化理解を深める必要がある。

そこで、学習した日本語を活用する場面を増やし、日本語を主体的に学ぶことに発展させる契機となるような試みを行う。またこのような試みを日本人生徒にとっての多文化理解の機会となるよう工夫する。

キ 専門家による研修会の実施

日本語指導を担当している教員が必ずしも日本語指導の専門性を持っているわけではない。また、専門的な知識を有する大学教授からの指導を受ける機会はほとんどないのが現状である。

そこで、大学教授による研修会を定期的の実施し（年2回）、研修を受ける機会とするとともに、研究に関する指導助言を受ける機会とする。

ク 教育課程の検討

各学校では、日本語指導に関する学校設定科目を設定しているが、より効果的かつ持続的に指導できる学校設定科目や教育課程の編成等が必要である。

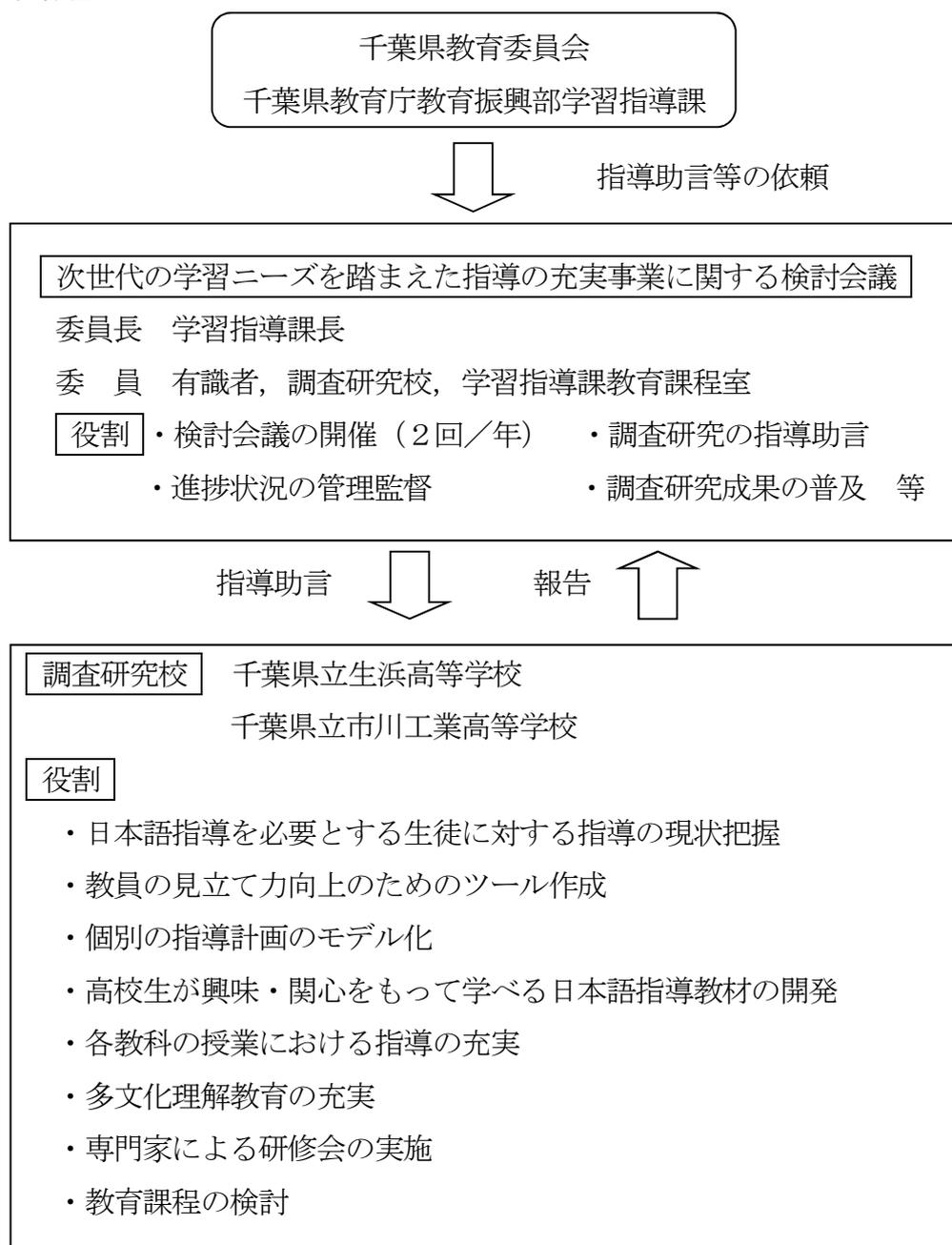
そこで、1年目の研究成果を基に、より効果的な学校設定科目の設定や、教育課程の編成等に関する研究を行う。

（5）調査研究校

調査研究は、千葉県立生浜高等学校（三部制定時制・普通科）と千葉県立市川工業高等学校（定時制・工業科）の2校において、大学教授や各校に1名ずつ配置する日本語指導員からの指導助言を受けながら実施する。

(6) 調査研究体制

ア 組織図



イ 指導体制

担当者氏名	所属研究機関 部局・職名	具体的な役割分担
新倉 涼子	千葉大学名誉教授	研究の助言
小畑 康生	教育庁教育振興部学習指導課 課長	研究の統括 推進委員会委員長

植草 貴久男	教育庁教育振興部学習指導課 主幹兼教育課程室長	研究実施校への指導助言
加瀬 直人	教育庁教育振興部学習指導課 主幹	研究実施校への指導助言
高木 優	教育長教育振興部学習指導課 主査	研究の事務主管
西野 将司	教育庁教育振興部学習指導課 指導主事	研究の事務主管 連絡調整

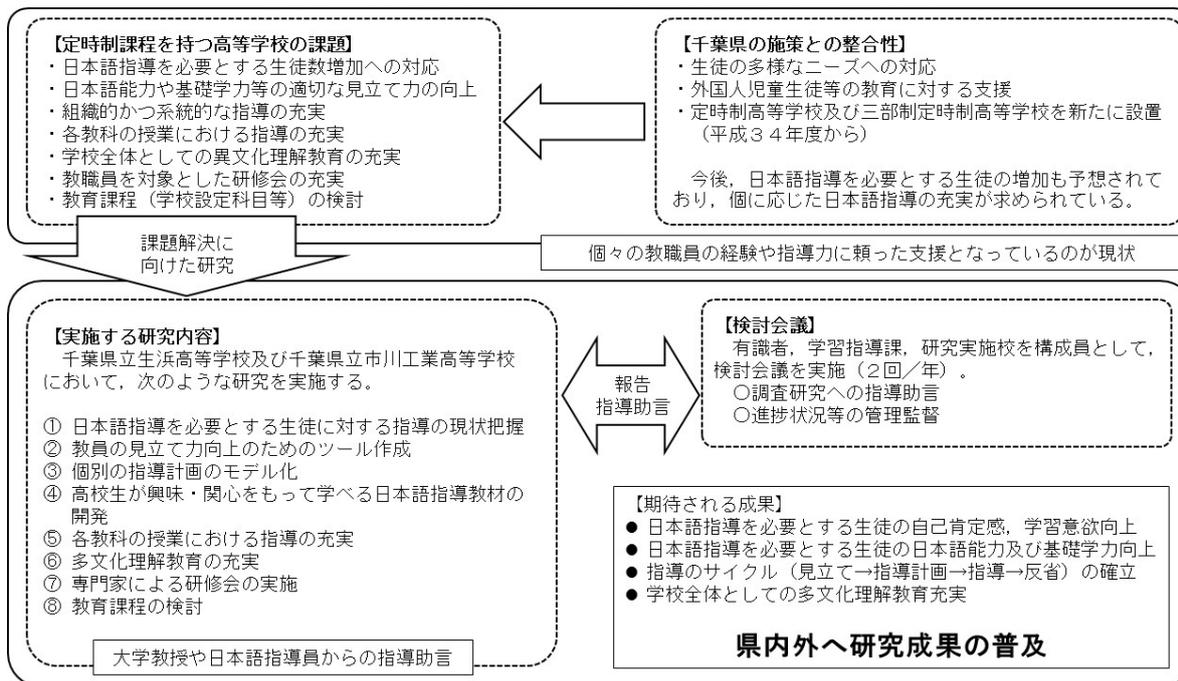
ウ 調査研究実施校担当者

担当者氏名	所属研究機関 部局・職名	具体的な役割分担
堀切 健一	千葉県立生浜高等学校長	調査研究の総括 事務処理
野崎 一哉	千葉県立市川工業高等学校長	調査研究の総括 事務処理
勝田 幸裕	千葉県立生浜高等学校副校長	調査研究の総括 見立て力向上・教育課程検討 事務処理
谷野 宏之	千葉県立市川工業高等学校教頭	調査研究の総括 日本語指導教材開発・各教科 の授業の充実 事務処理
木下 和弘	千葉県立生浜高等学校教頭	個別の指導計画 多文化理解教育 研修会責任者
善岡 将大	千葉県立生浜高等学校教務主任	教育課程の検討
網代 昭仁	千葉県立市川工業高等学校 教務主任	各教科の授業の充実
神保 正行	千葉県立市川工業高等学校 機械電気科長	各教科の授業の充実
小島 聡	千葉県立市川工業高等学校 建築科長，4 学年主任	各教科の授業の充実
田澤 義一	千葉県立生浜高等学校 1 学年主任	見立て力向上

照井 嘉宏	千葉県立生浜高等学校 2 学年主任	見立て力向上
前山 宏行	千葉県立生浜高等学校 3 学年主任	見立て力向上
菅澤 康雄	千葉県立市川工業高等学校 1 学年主任	日本語指導教材開発
千馬 勇	千葉県立市川工業高等学校 2 学年主任	日本語指導教材開発
根本 政蔵	千葉県立市川工業高等学校 3 学年主任	各教科の授業の充実
石橋 正治	千葉県立生浜高等学校 「日本語基礎」担当	多文化理解教育
小柴 有	千葉県立生浜高等学校 「日本語基礎」担当	個別の指導計画
宮崎 信伍	千葉県立生浜高等学校 「日本語基礎」担当	研修会
宮内 恭子	千葉県立生浜高等学校	研修会
泉水 智喜	千葉県立生浜高等学校	研修会
仲江 千鶴	千葉県立生浜高等学校 日本語指導員, 「日本語基礎」担当	個別の指導計画
深山 恵美子	千葉県立市川工業高等学校 「日本語講座」担当	日本語指導教材開発
三尾 敬次	千葉県立市川工業高等学校 「日本語講座」担当	日本語指導教材開発
相良 好美	千葉県立市川工業高等学校 日本語指導員	個別の指導計画
齊藤 博幸	千葉県立生浜高等学校事務長	会計処理
片山 明美	千葉県立市川工業高等学校事務長	会計処理
加藤 一男	千葉県立生浜高等学校副主査	会計処理
岡田 勝己	千葉県立市川工業高等学校副主査	会計処理

(7) 調査研究の概要図

定時制高等学校における日本語指導を必要とする生徒への支援体制の構築 (個に応じた日本語指導の充実に向けた学校の教育力の向上)



2 調査研究校の概要

(1) 千葉県立生浜高等学校の概要

ア 住所

〒260-0823 千葉県千葉市中央区塩田町372

イ 学校の種別・課程・募集定員

三部制定時制の課程

普通科	午前部	2学級	66名
	午後部	2学級	66名
	夜間部	2学級	66名

ウ 在籍生徒数

	1年次	2年次	3年次	4年次	合計
男子	91	93	93	28	305
女子	105	95	75	18	293
計	196	188	168	46	598

エ 学校の特徴

- 学ぶ意欲のある多様な生徒一人一人がその能力を十分に伸ばすことのできる学校
- 生活スタイル・進路希望に合わせた高校生活を自分自身で創造できる学校
- 全日制と三部制定時制併置の利点を活用した学校

- 地域と連携し、様々な教育活動ができる学校
- 各課程の特徴を生かして、高校生活を有意義に過ごすことのできる学校

オ これまでの日本語を母語としない生徒への指導実績

- 学校設定科目「日本語基礎」
個々の母語を大切にしながら、少しでも日本語に触れ運用能力の向上を図る。
- 学校設定科目「アドバンスト英語Ⅰ，Ⅱ」
英語の運用能力向上を図り，ALTとのTTで高度な4技能の習得を目指す。
- 母語による母国紹介
千葉県高等学校定時制通信制総合文化大会で日本語基礎履修者が母国文化紹介を母語と日本語で発表する。
- 日本語能力試験2級以上の取得者に単位認定
- 敬愛大学日本語検定講座の出張講座
敬愛大学で行っている日本語能力試験講座を本校で出張授業として実施した。
- 同じ出身国の先輩が後輩をサポート
日本語基礎を履修した生徒たちがチューターとして後輩に助言を行う。

(2) 千葉県立市川工業高等学校の概要

ア 住所

〒272-0031 千葉県市川市平田3-10-10

イ 学校の種別・課程・募集定員

定時制の課程

機械電気科 1学級 40名

建築科 1学級 40名

ウ 在籍生徒数

	1年次	2年次	3年次	4年次	合計
男子	23	45	28	24	120
女子	2	5	1	1	9
計	25	50	29	25	129

エ 学校の特徴（多様な学びを支える教育システム）

- 1年次は少人数授業を展開
- 実務代替，就業体験，高卒認定試験，資格取得を卒業単位として認定
- 定通併修制度，高大連携制度，学校間連携制度等を生かした三年修了制度
- 成人の特別入学者選抜制度や社会人聴講生制度を実施
- 国際理解教育の推進（外国人の特別入学者選抜制度や日本語指導教室の設置）

オ これまでの日本語を母語としない生徒への指導実績

- 学校設定科目「日本語講座」

外国人特別入学者選抜等で入学した1年次生徒に対して、日本語指導、日本の文化や習慣などに関する指導を実施。

- フィリピンの大学との姉妹校提携
セブ工科大学、フィリピン大学セブ校と姉妹校協定を締結。希望生徒は、夏季休業中に全日制生徒とともにフィリピンで姉妹校交流活動を行う。

3 調査研究計画

30年度	実施計画
6月	第1回研究推進委員会（実施内容の最終調整） 職員研修会（第1回） 日本語指導員の着任 見立てシートの作成
7月	個別の指導計画の作成
8月	第2回研究推進委員会（進捗状況の確認） 第1回検討会議（中間報告）
9月	見立てシートの再検討 個別の指導計画の再検討 先進校視察
10月	第3回研究推進委員会（進捗状況の確認） 千葉県高等学校定時制・通信制総合文化大会参加
11月	職員研修会（2回）
12月	第4回研究推進委員会（進捗状況の確認）
1月	第2回検討会議（今年度の総括、来年度の事業への提言等）
2月	「中間報告書」作成及び配付
3月	次年度計画の策定

第2章 平成30年度の取組報告

1 各学校における日本語指導を必要とする生徒に対する指導の現状把握

本事業を始めるにあたり、千葉大学新倉涼子教授の助言を頂いた。その中で強調されていたことは、生徒一人一人の実態を多角的視点から見極め、支援の在り方を模索していくことが重要であるということであった。そこで、初年度は各教師の視点を基に生徒の実態を把握することから始めることとした。

(1) 千葉県立生浜高等学校における現状

本校は在籍生徒584名（平成30年9月現在）のうち、「日本語基礎」を受講している生徒は24名であり、正確な調査は行っていないが外国につながる生徒は、100名近いと思われる。「日本語基礎」受講生の言語内訳は、フィリピン語11名、中国語7名、スペイン語2名、ペルシャ語2名、ネパール語1名、バングラ語1名である。

平成27年度から学校設定科目（2単位）「日本語基礎」を設定しているが、日本語指導を必要とする生徒に対する指導が十分に行き届いている訳ではない。以下、本校の現状を挙げる。

- 「日本語基礎」を受講するにあたり、生徒の日本語力等の調査は行っていないため、学習言語が身につくおらず日本語指導を必要とする生徒でありながら受講していない場合もある。
- 同じ言語の生徒同士が集まることにより、日本語を使用する機会が減るため、日本語の力がなかなか伸びないまま高校生活を過ごしている状況がある。しかし、お互いに励まし合うことで進級・卒業できる場合もあり、生徒のコミュニティの在り方を考えていく必要がある。
- 日本語が十分理解できない保護者も多い。また、日本語が理解できても、日本の学校教育制度を十分理解していない保護者もあり、保護者との連絡に困難をきたしている状況がある。
- 教員同士が日本語指導を必要とする生徒に対する指導の在り方について、意見交換をする機会をほとんど持てない。

そこで、現状を詳しく把握するため、教員を対象にアンケートを実施した。

ア 目的

- (ア) 教員の視点から外国につながる生徒の実態を把握すること
- (イ) 授業及びホームルームにおいて、指導上の悩み・困り感を把握すること
- (ウ) 授業及びホームルームにおいて、指導上の工夫を把握すること

イ 調査対象

定時制課程の教員を対象とし、40名から回答を得た。

（午前部9名、午後部10名、夜間部12名、無記名9名）

ウ アンケートの質問項目

- Q 1 授業等（学習指導）において気づいたこと，困っていることなど
- Q 2 授業で工夫していること
- Q 3 ホームルームにおいて気づいたこと，困っていることなど
- Q 4 その他の場面において気づいたこと，困っていることなど
- Q 5 学校全体への要望など

エ アンケート結果

(ア) 授業等（学習指導）において気づいたこと，困っていることなど

【生徒側の問題】

- 授業を理解する日本語の運用能力が不足していることが生徒の欠席につながる傾向にある。
- 日本人生徒と日本語の運用能力の差が大きく一斉授業が困難である。
- 教科書の専門用語を理解させることが困難である。
- 板書を書き写しても授業内容は理解していないと思われる。
- 日本人生徒でさえ難しい内容を教えるのは困難であり，習熟度に大きな差がある（国語科）。
- 数式により理解が得られやすい反面，文章題や新出記号を理解することが難しい（数学科）。
- 生徒の学力差が大きく指導が難しい（外国語科他）。
- 日本語の運用能力が不十分なためスポーツのルールが理解できない（保健体育科）。
- 実習時の指示が伝わらない（家庭科）。
- 同じ出身国の生徒で集まりがちでそれ以外の生徒との会話が少ない。
- 日本語指導を必要とする生徒への日本語指導が，他の授業に良い影響を与える面もある。

【教師側の問題】

- ワークシートやテスト問題などの教材について，日本語指導を必要とする生徒向けのフォローを行う負担が大きい。
- 日本語でも英語でも会話が困難な生徒とのコミュニケーションが難しい。
- 文章題や新出記号をどう教えるかに悩む（数学科）。
- 生徒の理解度の評価に課題がある。

(イ) 授業で工夫していること

【生徒側の問題】

- 分かりやすい日本語での指導を心がけている。

- 日本語ができる生徒とできない生徒とをペアリングすることで、授業への理解を深めている。
- 机間巡視等で個別の対応に努める。
- 文章題では母語で考えさせるようにしている。
- アクティビティに際し日本語と英語で指示をする（英語科）。
- 各生徒の能力に応じて学習目標を明確にする（英語科）。
- 日本語の板書を少なくする（数学科）。
- 一緒に筆を持つての指導を心がけている（芸術科（書道））
- イラストを用いて指示を伝わりやすくする（家庭科）
- ネットの翻訳サイトを利用してコミュニケーションをとる（情報科）。
- 漢字を読めない生徒には手書き入力を使っている（情報科）。

【教材】

- ワークシートやテスト問題に英訳やルビをつける。
- 重要語句、専門用語は日英対応表を提示する。

【評価方法】

- 授業のレベルは下げずにノートや提出物で評価する。
- 定期考査では漢字の多少の間違いは許容している。

(ウ) ホームルームにおいて気づいたこと、困っていることなど

【進め方・内容等】

- 「個人調査票」など個人情報の提出内容が不十分で連絡に支障がある。
- 年度初めに生徒の予備情報が少なすぎである。
- そもそも「母語」「国籍」等の情報把握が担任任せになっている。
- 配付文書やアンケートで使用する用語が難しく、生徒も保護者も理解できない場合が多い。

【時間の制約、人数等】

- SHRでは時間的制約があり十分に対応できない。
- 内容をよく理解させるには個別の説明時間が必要で負担に感じる。
- 30名を超えるHRでは情報伝達に限界を感じる。

【保護者】

- 保護者が日本語を理解できない場合があり、特に電話対応が難しい。
- 保護者が履修や欠課時数超過などについて理解できていない。

【生活習慣・価値観等】

- 宗教上の問題で指導が難しいことがある。
- 欠席や遅刻に対する認識が甘い生徒がいる。
- ピアスや口紅などを文化の違いを理由に正当化するため指導がしにくい。

- 日本語が分からないふりをして指導に従わない。
- 価値観や文化の違いに戸惑う。

【その他】

- 少しずつ日本語を話せるようになっている生徒もいる。
- 人数が少なく個別に対応できている（夜間部，4年次）。

（エ）その他の場面において気づいたこと，困っていることなど

【生徒の情報】

- 生徒の在留資格が分からないと進学・就職指導ができない。また，教員にもその知識が不足している。
- 海外進学を希望する生徒が増えているが，情報不足で対応できていない。
- 学校で配付する説明会の資料等は外国語バージョンもほしい。

【就学の目標】

- 就職等に有利なので卒業だけはしたいという生徒が多く，新しい教育方法の模索が必要である。

【保護者との関係】

- 日本語を理解できない保護者も多く，生徒に通訳してもらう状況である。
- 保護者と連絡が取りづらく言葉も通じない。
- 集金関係が色々と難しい。

（オ）学校全体への要望等

【生徒に関する情報収集】

- 生徒の就労資格についてなど，入学時に生徒の在留資格を組織として確認しておく必要がある。
- 高校入学前にどのような環境で教育を受けてきたか知りたい。
- 授業が始まる前に生徒の日本語の運用能力の情報がほしい。
- 日本語が理解できず単位を落としてしまう生徒がおり，入学させる生徒はある程度の日本語の運用能力を持つよう，入試では慎重な審議が必要である。

【日本語授業，教材】

- 日本語基礎の必修化や日本語講師・講座数増が必要である。
- 日本語の習得の機会が少なすぎる。日本語基礎の授業を増やせないのであれば，これ以上の日本語指導を必要とする生徒の受け入れは難しいと感じる。
- 教科によっては，取り出し授業の必要性を感じる。
- どのような生徒であるかを担任と教科担当とで共有する機会があると良い。
- ルビが振ってある教科書等が必要である。
- 教員同士が相互に授業に立会い，そこでの工夫を学んだり，議論をしたりする場が必要である。

- 単に他県の取組をなぞるのではなく、千葉県（あるいは生浜高校）独自に教育実践の方法を模索するような検討会を実施してほしい。

【HR】

- 日本語指導を必要とする生徒の受け入れを積極的に増やしてしまうと、HR運営に支障をきたす可能性もある。

【研修】

- 生徒の進路指導に関わる研修を早く実施してほしい。

【進路】

- 日本語指導を必要とする生徒も学びやすい環境であることを知って入学してくるが、外国人同士でグループをつくり、日本語を使用せず、卒業後に帰国する現状がある。
- 卒業後の進路に応じて日本語能力試験を取得させるなど、日本語指導の充実と生徒の在留資格に合わせてどのように進路指導に取り組むかを検討し、対策を講ずる必要がある。

【その他】

- 日本語指導を必要とする生徒の数が今後も増えることが見込まれ、英語でも重要な文書等を作る必要がある。この場合、英語科への負担を考慮し外部委託などの策が必要である。
- 本校の現状を理解した適切な人事をしてほしい。

オ 現状と課題

【教員へのアプローチ】

アンケート結果から、多くの教員が日本語指導を必要とする生徒について、何らかの問題意識を持っていることが分かった。本校に在籍する生徒の国籍は多様化しており、家庭状況も様々であることから、各教員が直面している問題も多岐に渡っている。しかし、これまでこのような情報を整理し、共有する取組はなされてこなかった。アンケート結果から、複数の教員から同じような回答があったことを考慮すると、各教員が抱える問題を適切に共有し意見交換する取組は、教員間の連携を強化し、それらの問題の解決策を見いだすことに繋がると考える。

また、日本語指導を必要とする生徒個々の情報を、関係する教員間で共有することも生徒を指導していく上で不可欠である。これまでは、各担任が入学後に提出される個人調査票で生徒の状況を確認してきたが、それに加えて、今年度から日本語指導を必要とする生徒には詳細な聞き取りを行って情報を収集してきた。今後は、第2章2（1）見立てシートを用いて、組織として日本語指導を必要とする生徒の情報を収集・整理し、教員間で効果的に共有していくことが重要であると考える。

生徒の在留資格等についても注意しておきたい。現状では、就職指導を始めてから日本で働ける在留資格を所持していないことが判明する生徒もおり、大きな問題となっている。在留資格や国籍等は個人情報であり、取扱いには細心の注意が必要となるが、適切な進路指導を行うには不可欠な情報といえる。これらをどのように調査するのか、明確な方針を定める必要がある。

日本語指導を必要とする生徒に対する指導を行う上で、必要な知識を有する教員は非常に少ない。今後、このような生徒が増えていくことが見込まれている中、専門的な知識を教員が持つことが必要になってくる。そのための研修会や情報発信の場を提供していくことも今後の課題となる。

【生徒へのアプローチ】

日本語指導を必要とする生徒をサポートする取組の中に、「生徒の母語・母文化を大切にすること」がある。特に、来日して日が浅い場合はもとより日本語の運用能力が十分でない場合は、言葉によるコミュニケーションが成立しづらいことが原因で、学校生活に困難を抱えるケースも多い。そのため、日本語指導を必要とする生徒へのアプローチには、生徒が持っている言語の運用能力や生徒の出身国などを考慮する必要がある。また、上記アンケートで指摘されているように、同じ出身国の生徒同士が一緒に行動することに対するマイナスもあるが、一緒に行動することで、彼らが学校で孤立せずに助け合い支え合いながら困難を乗り越えていくケースも多々ある。しかし、日本の学校で学んでいく上で、日本人生徒との関わりは大事な機会であるため、彼らだけを対象とするのではなく、日本人生徒も含めたアプローチを考えていくことが重要である。

また、外国につながる生徒の進路を考える際、彼らの母語を含む言語の運用能力を強みとして生かせるようなアプローチが必要となる。本校では日本語能力試験や実用英語能力試験で一定以上の級を取得した場合は、増加単位として認定しているため、就職や進学をする際の目標として、日本語や英語のレベルアップを目指している生徒も数多く在籍している。

以上、外国につながる生徒の母語・母文化に焦点をあてたアプローチを紹介してきたが、外国につながる生徒が全て、母語・母文化を自分自身のアイデンティティとして捉えているとは限らないところにも留意しなければならない。

【保護者へのアプローチ】

本校は三部制の定時制であり、単位制をとっているため、自分の所属する自部の授業だけでなく、他部の授業を履修することで3年間での卒業が可能である。自身の選択の仕方で自由に日課を組んで卒業を目指せる一方で、履修や卒業に関するシステムを十分に理解していない生徒やその保護者が問題となっている。これらのシステムについては、入学許可候補者説明会において、一斉に説明を行う

とともに、説明会終了後に日本語指導を必要とする生徒や保護者には別室にて更に詳しい説明を行っている。しかし、アンケート結果からは、十分に理解できないまま高校生活を過ごしている生徒や保護者が存在していることが分かる。現状では各担任がそれぞれ独自に対応しているが、学校全体として明確なガイドラインは用意されていない。

また、家庭への電話連絡等も、日本語が話せない保護者においては困難な状況となっている。通訳を通す、できるだけ平易な日本語で話す、英語を用いる等の対策を各教員が講じているが、正確に伝わっているかどうか分からない場合が多い。このように家庭との意思疎通が不十分な状況の中、担任が知らない間に保護者と共に帰国してしまい、長期間欠席となる生徒も存在している。本校では中国語とフィリピン語を話せる教育相談員が定期的に来校し、必要に応じて保護者面談の際に同席してもらう等の支援体制を整えているが、こうした状況を見るとまだまだ十分とは言えない。

以上のことから、入学後早期に生徒や保護者へ学校についての各種説明及び理解を徹底するとともに、日々の家庭連絡や保護者宛の文書配付、進路情報の発信等をする際の具体的支援策を検討していくことが課題であると言える。

(2) 千葉県立市川工業高等学校における現状

本校は在籍生徒124名（平成30年9月現在）のうち日本語指導を必要とする生徒は19名であり、外国につながる生徒は30名に近い。日本語指導が必要な生徒の言語別内訳は、中国語6名、フィリピン語5名、ダリー語4名、スペイン語2名、タイ語1名、ウルドゥー語1名である。

本校では平成22年度から「外国人の特別入学者選抜」を導入した。その際日本語力が十分でない生徒のために日本語の補習を行う必要があるとの意見が出て、日本語補習教室（レインボールーム）が設置された。平成29年度からは「日本語講座」（学校設定科目）という名称で、午後4時30分から午後5時15分まで週4時間の授業を行い、出席管理、定期考査も行い、履修・修得が認められれば4単位の増加単位として認定している。使用しているテキストは「みんなの日本語 初級Ⅰ」、「みんなの日本語 標準問題集」（ともにスリーエーネットワーク）、「かんじだいすき（一）～（六）」（国際日本語普及協会）で、文法の例文でも、漢字の読み方・書き取りの例文でも、音読させることにしている。また、季節に応じて正月、節分、ひな祭り等の年中行事や日本文化、日本地図や日本の気候についても説明している。漢字文化圏である中国出身の生徒は漢字を見れば意味はわかるが、読むことができない（特に訓読み）。中国以外の国の出身生徒は逆に、簡単な訓読みはできるが、音読みする漢語は読めないうえに、意味がわからない傾向がある。高校の授業は抽象的な概念の漢語ばかりで、国語、地歴公民、理科、保健の授業は先生の話す内容も、漢字にふりがなをつけてあ

るプリントを見ても意味が全くわからないということになる。日本人が英語を勉強する際、英単語帳をつくって、スペリングと発音、意味を覚えるように、外国人生徒が自分で語彙を増やす努力が必要ではないかと感じている。ただし、母国語で抽象的な思考ができるほどの言語力を身につけていないと、日本語の学習言語を習得することは難しい。今後は、外国人児童生徒等教育相談員との連携を深め、受け入れた外国出身生徒たちが授業を理解できるような指導や教材を開発していきたい。

上述のように、平成22年度の「外国人の特別入学者選抜」実施を機に日本語指導の重要性が校内で認知され、指導体制が構築されつつあるが、実際には各担当者の手探りの状態が続いているのが現状である。以下、本校の支援の現状を挙げてみる。

- 日本語指導は、学校設定科目「日本語講座」（4単位）で行っている。生徒によってはアルバイト等で出席できない場合もあり、4単位修得に至らないケースもある。
- 日本語指導を必要とする生徒は多いが、「日本語講座」の受講を希望しない生徒もおり、その中には「日本語は大丈夫」と言う生徒も少なくない。このため、学習言語としての日本語が身につかず、授業内容が理解できないまま進級・卒業していく生徒も多い。
- 外国人児童生徒等教育相談員として3名（中国語、フィリピン語、スペイン語）が支援にあたっているが、勤務する曜日・時間が限られ、また対象生徒が欠席することもあり、支援や相談の機会が確保できない状況もある。
- 授業やHRにおいては担当者がそれぞれ工夫し丁寧な指導を行っているが、残念ながらその経験が継承される機会は少ない。
- 日本語が分からない保護者も多く、家庭との連絡に困難をきたしている状況がある。
- どこでつまづいているか、どこで困っているか、なかなか生徒から聴き出せない状況がある。各生徒の学習・生活面での状況把握がまず必要である。

本事業を開始するにあたり、千葉大学の新倉教授から次のような指導を受けた。

- | |
|---|
| <ul style="list-style-type: none">● 個々の支援計画の作成にあたり、まず生徒一人一人の実態を把握することが重要である。● 教員の中から見た生徒の実態把握を行い、支援の在り方を打ち出すことに意味がある。● 教員によって視点が異なっている。授業やHR等の具体的な場面で気付いたこと、なぜなのだろうと思ったことなどを持ち寄ることから始めてほしい。 |
|---|

そこで、初年度は生徒の実態把握から始めることとした。

ア 目的

- (ア) 教員の視点から外国につながる生徒の実態を把握すること
- (イ) 当該生徒に対する教科指導・生徒指導上の悩み・課題を把握すること
- (ウ) 当該生徒に対する指導上の工夫を把握すること

イ 調査時期

- 第1回：平成30年9月24日（月）～10月12日（金）
- 第2回：平成30年10月19日（金）

ウ 調査対象

- 第1回：本校定時制教員（9名から回答を得た。）
- 第2回：職員研修会（10月19日実施）参加者（16名より回答を得た。）

エ アンケートの項目

(ア) 第1回：日本語指導を必要とする生徒についてのアンケート

- 1 授業等（学習指導）において
 - (1) 気づいたこと、困っていることなど（※できれば生徒別に記入を）
 - (2) 授業等で工夫していることなど
- 2 ホームルーム、学年等において
 - (1) 気づいたこと、困っていることなど
 - (2) ホームルーム、学年等で工夫していること、学校全体への要望など
- 3 その他の場面において 気づいたこと、困っていることなど

(イ) 第2回：職員研修会後に実施したアンケート

- 1 講演で印象に残ったこと、これは大事だ、大切だと思ったこと等
- 2 日本語指導や支援についてこれから取り組んでみたいこと

オ アンケート結果の概要

(ア) 第1回職員アンケート

本調査研究の趣旨や内容が職員全体に十分浸透していない中でのアンケート実施であったため回答数は少なかったが、教員の視点から見た生徒の実態、教員の悩み・困り感の特徴的なものは見て取れる。以下、回答の概要を挙げる。

【授業・学習指導上の課題】

- 学習上必要な日本語能力が不足しているため授業を理解できない、指示が通らないことを懸念する声が多数見られた。特に欠時数の多い生徒や無気力な学習態度を見せる生徒については、「日本語の理解力が原因なのか、生徒のやる気の問題なのか把握が難しく、アプローチの仕方に困る」という声に代表されるように、彼らが学習から遠ざかってしまう原因を同定することが難しいために、指導や支援の在り方に悩む教員の姿が見て取れた。
- 教員の指示や学習内容の理解が不十分であるにもかかわらず、生徒本人が自

分は分かっていると自認している場合、その後の指導がより難しくなるという意見も見られた。このような生徒と教員間の状況認識の齟齬が、生徒へのアプローチをより困難なものにしていることが予想される。

- 「日本語の理解が浅いため、実習において安全のための指導がうまく伝わっておらず危険だったことがあった」といった意見に見られるように、安全に十分な配慮が必要とされる機械や電気、建築等の実習科目における指導の在り方、配慮の仕方については、今後早急に取り組むべき課題のひとつに挙げられる。

【授業やHR等での指導上の工夫・配慮】

- 板書・ワークシート・定期考査問題へのルビ振りがもっとも多く挙げられていた。その他、教員のできる範囲で英語を使用する、教員が行った説明を生徒本人に説明させることで理解度を図るアプローチをとるといった意見も見られた。

(イ) 第2回職員アンケート

【生徒・親の背景の把握、ビザの確認について】

- 生徒・親のビザの種類を知ることが生徒理解につながる等、生徒の背景を知ることが重要である。
- ビザの確認の必要性については、個人情報の問題があるが、それを聞き出すのも教員の技術と話していた。そこまで踏み込んでいいのかとも感じた。

【母語保持の大切さと日本語学習（生活言語と思考言語の違い）】

- 会話ができていて安心していたが、本人にこちらの意図がきちんと理解できていないこともあるということを考えて対応する必要がある。
- 言語習得と思考の発達。読み書きはできるが概念的に理解できるかは別ということ。

【保護者との関係】

- 保護者（母語）と生徒との関係への配慮。
- 見立てにより生徒を理解する事が保護者とのかかわりにつながると感じた。

【授業、アプローチの工夫】

- 「外国人にわかりやすい授業は、日本人にもわかりやすい授業だ」。授業の工夫をすることが大切だと思った。
- 生徒の発達段階によってアプローチ方法も変える必要がある。

【対応・指導の仕方、問題提起】

- とても参考にはなったが、「定時制」に限らず「高等学校における…」とする内容ではなかったか。
- 国や県が最低限の努力しかしていない。現在の職員に頼り切っている点も問

題である。対応する職員の確保。

回答の中には、登校がままならない生徒が多い夜間定時制高校において、日本語指導を必要とする生徒への支援をどこからどのように始めたらよいか、個人情報との関係で生徒の状況把握にどこまで踏み込めばよいか、という戸惑いも寄せられた。こうした率直な声を大切にしながら支援の在り方を検討していきたい。

カ 現状と課題

2回の職員アンケート調査を通じて、日常授業やHR等で接している教員の視点から見た日本語指導を必要とする生徒の実態の特徴、及び教員の困っていることの主な内容については一定程度把握できたと考えられる。しかし、回答数の少ない点からも職員の網羅的な内容とはいえない。日本語指導を必要とする生徒の状況は多様であり、生徒との対応も一律にはいかない。日本語支援についても、そのイメージは個々の教員によって異なる。アンケートの回答結果については12月14日に全職員に報告したが、今後は職員相互の意見交流が必要である。特に、授業やHR等で指導やアプローチで工夫している内容については互いに参考になるものも多く含まれている。

今回のアンケート調査は、日本語指導を必要とする生徒の支援を研究・検討するにあたって、その端緒となり得ると考える。

10月の職員研修会及び第2回アンケートを通して、今回の調査研究が日本語指導教室（「レインボールーム」）に限定されるものではなく、それぞれの授業やHR指導等、教職員一人一人の課題であることが共有された。このこと自体が大きな変化と言える。調査研究の前提として、職員相互の意見交流、協力体制が不可欠である。その意味でも、職員アンケートの実施と報告は大きな意味があった。

アンケートを通じて、具体的に、授業やHRにおいて何をどのように行えばいいのか、個人情報との関係で生徒の状況把握にどこまで踏み込めばよいか、といった声があった。こうした視点を大切にしながら、日本語支援、日本語指導を必要とする生徒への支援を考えていきたい。

定時制の工業高校である本校として、どのような支援が求められているのか。これが究極の課題であるが、そのために、本校としてこの調査研究をどのようにすすめていくのがよいか、また、職員一人一人にどのように投げかければいいのか。これもアンケートから浮かび上がった課題である。

なお、回答で寄せられた疑問や課題については、今後参考となる資料や情報等を紹介しながらフィードバックしていくことを、12月の校内報告で確認した。

2 教員の見立て力向上のためのツール作成

(1) 千葉県立生浜高等学校の取組

日本語指導を必要とする生徒の特徴として、複数の文化間を移動していることが挙げられる。これまでは、日本語を母語とする生徒と区別せずに、全生徒を対象とした個人調査票（住所、家族構成、家族の年齢、現在の職場等が記載されているもの）を年度当初に提出させたり、教員同士が情報交換したりすることで、生徒の状況を把握するだけであった。

そこで、教員の見立て力向上のためのツールとして使用する「見立てシート」を作成するために、今年度はその前段階でのアンケート（添付資料2）を基に、見立てシートの作成及び活用方法等について検討した。

ア 見立てシートで調査すべき内容

見立てには、現在の状況に関するものと長期的視野に立ったものの両面がある。そのうえで、必要な項目として、生徒の生活環境・教育歴・言語能力・学力の程度・パーソナリティなどが挙げられる。各項目の詳細は以下に示す。

○生活環境や教育歴

来日した時期（生徒の年齢）・回数、家族構成等

○言語能力

日本語の力だけでなく母語の力等

○学力の程度

思考言語能力の確立の有無や現在の学力の情報等

○パーソナリティ

個々の文化的背景を考慮し、様々な側面から長期的視野にたった把握が必要

イ 見立てシート活用の意味

生徒個人の情報を把握することはもちろん、在籍する日本語指導を必要な生徒の集団としての特徴を把握することにもつながる。そのためにも、見立てシートで得られた情報を多角的に分析し、問題の複合要因を見極めることが重要である。以下に示す報告は、見立てシートに移行する前段階でのアンケートの集計である。

(ア) 調査時期

科目「日本語基礎」の最初の授業（平成30年4月）

(イ) 実施対象

科目「日本語基礎」の受講生24名

(ウ) アンケート結果

【出身国等】

- 8か国と多岐にわたる（フィリピンが一番多く11名）。

- 近年、イスラム圏からの生徒が増えている。
- 生徒全員義務教育を日本以外の国で受けた経験がある。
- 日本と母国を往還している生徒も複数いるが、滞日期間3年未満の生徒が8割を超えている。

【家庭内言語】

- 日本語の使用は父親との会話が一番多かったが、それでも3割程度で、母親または兄弟に関しては母語の方が使用されていた。
- 家庭内言語は母語が主要な言語となっている。

【学習言語】

- 3割の生徒が日本語のみで学習しているが、母語のみや母語と併用して学習している生徒が6割を超えている。
- 現在も母語を学習していると答えた生徒は4名にすぎず、それも家庭内で自学している状況で、母語を学習する環境は非常に厳しいと思われる。

【学校生活等】

- ほとんどの生徒が学校生活は楽しいと回答し、その理由として友達との関わりを挙げている生徒が大多数であった。
- 得意科目を英語と回答した生徒が17名で、数学・体育がそれぞれ2名であった。一方不得意科目では国語が16名と多く、「たくさんある」と回答した生徒も複数いた。
- 日本語が理解できなかったことで友達関係が築けず、7割近い生徒が母国に帰りたいと感じた経験をもつ。

【生徒の日本語の運用能力及び母語の運用能力】

学習に必要とされる日本語の運用能力を表1に示した。数値は生徒の申告によるものである。母語では読むことも書くこともできる生徒が大半であるが、日本語では話すこと以外苦手意識をもつ生徒が多かった。

この結果から、日本語基礎受講生にとって、日本語で行われている通常学級での授業を理解することは非常に困難な状態であることが推察される。

しかし、生徒達は日本語で日常生活を送ることができるため、周囲からは日本語が理解できないことを理解してもらえにくい状況にあると考えられる。

表1 学習に必要とされる日本語の運用能力 (N=24)

(話すこと：自分の思ったことが話せるか、聞くこと：授業中の先生の説明がわかるか、
読むこと：教科書が読めるか、書くこと：作文が書けるか)

	話すこと	聞くこと	読むこと	書くこと
全然できない	0	0	4	3
あまりできない	8	13	12	10
だいたいできる	13	11	6	8
よくできる	3	0	2	3

表2 学習に必要とされる母語の運用能力 (N=24)

(話すこと：自分の思ったことが話せるか、読むこと：母語の教科書が読めるか、書く
こと：作文が書けるか)

	話すこと	読むこと	書くこと
全然できない	0	0	1
あまりできない	0	2	1
だいたいできる	3	3	3
よくできる	21	19	19

イ 見立てシートの評価

見立てシート（本報告では、アンケートに基づく）で得られた情報は、生徒が置かれている状況を客観的に判断する材料となる。生活環境や教育歴を把握することで、生徒の思考の発達と言語習得がどのような状況であるのか、またはどのようなリスクを抱えている可能性があるのか推察することができる。また、生徒の言語力を日本語と母語の両面から把握することで、日本語の運用能力だけで判断するといった偏った見方を回避することにもつながる。それと同時に、家族間での共通言語があるのかなど、学校生活だけではなく家庭における生徒の言語環境を理解することにもつながる。

ウ 次年度への課題

見立てシートの様式（内容）と、見立てシートの実施方法の両面から検討する必要がある。

(ア) 見立てシートの様式（内容）に関して

個人情報ではあるが、生徒の両親及び生徒自身の国籍、在留の種類（在留資格）は特に重要な情報である。学習支援や海外修学旅行の実施、卒業後の進路指導等に適切に対処するためにも、彼らがおかれている状況を正確に把握することが必要である。

教育歴に関しては、出身国、来日時期（年齢）、滞日回数、滞日期间が重要な観点となる。そのため、直近の来日時期を把握するだけでなく、生徒のライフヒストリーを把握する必要がある。言語力に関しては、日本語の運用能力を評価する際どのようなツールを用いることが可能であるか検討する必要がある。日本語を母語としない者を対象とした日本語能力試験もあるが、本研究で対象としている生徒にそのまま利用するには、内容・レベルともに無理もある。様々なツールに関し、その使用状況などを調査分析する必要がある。

この他に、母語の運用能力や学力の程度、パーソナリティにも配慮した見立てシートを検討していく必要がある。

（イ）見立てシートの実施方法に関して

教員が見立てに際しての洞察力、共感力、分析力を育成することが重要である。そのためには、教員に対する研修を充実させることが必要となる。文化間を移動することで、子供の思考の発達や言語習得にどのような影響があるのか、そもそもそのような子供にはどのような傾向があるのか、そして、高校生を指導していくうえで、進路のためにどのような情報が必要であるのか、言語能力の発達、思春期青年の心的変化、滞在資格（ビザの種類）等多角的視点からの研修が必要である。そのうえで、教員が実際に見立てシートを埋めて行くことで得られた情報を多角的に分析することより、問題の複合要因を見極めることにつながる。

（２）千葉県立市川工業高等学校の取組

ア 背景

本校ではこれまで在籍する外国人生徒の国籍や在留資格、滞在期間等の一元的な把握は行わず、入学者選抜において「外国人の特別入学者選抜」で入学した生徒を中心に、担任やレインボールーム担当教員による面接を通じ、日本語・母語運用能力等の側面から支援の必要がありそうな生徒に「日本語講座」（学校設定科目・４単位）の受講を勧める、生徒の母語ができる教育相談員を配置する等の支援策を取ってきた。しかし、このような把握方法・支援策の決定は教員の経験値に左右される部分があり、生徒の詳しい状況を十分に見とることができなかった可能性も拭えない。

特に２～４年次の生徒については、１年次に「日本語講座」を受講していた生徒であっても、２年次以降はほとんどの生徒が継続受講しないため、教科学習に必要な日本語力が十分に備わったのか、学年が上がるにつれて内容が高度化する通常授業についていけているのかが定かではないのが現状である。そうした状況下で、授業について行けず、中途退学に至るケースも少なくない。また、３・４年次の生徒については、卒業段階になって在留資格に就労制限が発覚するなど、希望する進路に進めないケースが毎年のように発生しており、教員間では進路指導における課題

として認識されている。

このように、外国人生徒の指導・支援をめぐることは、入学時の受け入れ段階から卒業に至る各プロセスにおいて、生徒の背景情報が教員間で共有されていることが必要となってくる。そこで、本年度は改めて本校に在籍する「外国にルーツがある生徒」のうち支援の必要性がある生徒の在籍状況と、支援ニーズを把握・共有することを目的に、以下の順で生徒調査を実施した。なお、調査実施時期は平成30年11月～平成31年2月とした。

- ① 外国にルーツがある生徒の現況調査（主にクラス担任）
- ② 学校生活と日本語学習についての生徒アンケート（①で挙げられた生徒を対象）
- ③ 生徒アンケートについてのフォローアップ・インタビュー（②を提出した生徒全員）
- ④ 生徒プロフィールの作成（①～③の情報を総合）

イ 本年度の取組

（ア）外国にルーツがある生徒の現況調査（平成30年11月実施）

まずクラス担任を対象に、クラスに在籍している外国にルーツがあると思われる生徒全員の氏名・出身国（ルーツがある国）のほか、学校生活の状況・日本語力・家庭状況を、担任の主観で評価してもらい、生徒の気になる点については備考欄に記入してもらった。その結果、20名の在籍が確認された（うち1名は平成31年1月に中途退学）。在籍生徒の出身国は次のとおりである。

中国：6人　フィリピン：6人　アフガニスタン：3人　ペルー：2人
パキスタン、アラブ首長国連邦、タイ国：各1人

（イ）生徒アンケート（平成30年12月実施）

次に、（ア）で挙げられた生徒に対し、担任を通じ学校生活と日本語・母語での学習についてのアンケートを実施した（添付資料2）。

（ウ）フォローアップ・インタビュー（平成31年1月～）

担任アンケートから把握された20名のうち、中途退学者1名、ほとんど学校に来ていない3名、多数の教員から見て、学校生活・日本語力に問題のないと思われる2名を除いた14名を対象に、（イ）の生徒アンケート内容について、順次日本語指導員の面接によるフォローアップ・インタビューを実施した。

（エ）生徒プロフィール（個人シート）の作成（平成31年2月作成予定）

（ア）～（ウ）で得られた情報をもとに、生徒1人1人の来歴や滞在歴・在留の種類・母語・日本語の様子・将来展望・保護者の日本語状況等をまとめた個人シートを作成した。

ウ 見立てシートの活用・個別指導計画のモデル化に向けて

本年度は、本研究事業がめざす見立てシートの作成・活用、そして個別指導計画

のモデル化に向け、本校における外国人生徒の学校生活と言語状況をめぐる現状把握を行うにとどまった。今回の生徒調査を通じ、概ね以下のような傾向が見えてきた。

【日本語力・学習について】

- 2年次以上にも教科学習に必要な日本語力が十分でない者が多数おり、学習ニーズはある。しかしながら、レインボールームでも個人でも継続的な日本語学習を行っていない。
- 在籍生徒の多くが中学生以降に来日し、来日後1、2年で高校に進学している（＝思考言語が確立されてからの来日）。そのため、ほとんどの生徒が日本語による読み書きに自信がなく、普段の授業に何らかの困り感をもっている。

【母語について】

- 母語での読み書きについては自信を持っている生徒が多い。
- 家庭内の使用言語は、母語のみを使用しているケースが多いものの、来日後は、家族との会話以外に、母語の学習をしている者は少ない。

【進路について】

- 卒業後の見通しとして、日本での定住・長期滞在を望む者が多いものの、就職か進学かを決めかねている生徒が3、4年次にも多数おり、進路選択についての支援ニーズが見受けられる。
- 4年制の特性上、卒業時に18歳を超えるため、外国籍の生徒、特に家族滞在の生徒は、ビザの切り替えが必須となる。しかし、本人の進路が定まらないために、手続きが取れないといった状況にある生徒もいる。また、本人や家族が、自分の滞在資格やその切り替えの必要性について、正しい知識を持っていないことがうかがわれるケースも散見される。

以上のような傾向からさらに課題を整理し、次年度は「指導の前提となる見立てシート」の項目の検討・作成」「見立てシートをもとにした個別指導計画のモデル化と検証」「見立てシート・個別指導計画を活用した日本語指導・教科指導の実施」を行う予定である。

3 高校生が興味・関心をもって学べる日本語指導教材の開発

現状として、一般的な日本語学習用の教材を活用した日本語指導だけでは、必ずしも日本語を学ぶことに食欲ではない生徒の学習意欲を維持できていない。そのため、高校生が興味・関心を持って学べる日本語指導教材の開発が必要とされる。また、日本語の学習を通して、日本語だけでなく日常生活に必要な知識等も学習させることができれば、その効果は更に高まると考えられる。

教材開発にあたっては、他教科との連携を図ることで一層の興味・関心を持てる教材になると考え、今回は地歴・公民科と連携して防災教育を行った。以下、千葉県立生浜高等学校における取組を報告する。

(1) 目的

千葉県立生浜高等学校の「日本語基礎」の授業では、日本語の学習指導だけではなく、定期的に日本の地理・気候・文化等を学習する時間を設けている。そのなかで平成30年12月に、近年その必要性が増している防災に関する授業を行った。実際に、平成30年6月18日の大阪府北部地震や同年9月6日の北海道胆振東部地震では、特に訪日外国人旅行者が停電によって情報を得られず情報弱者となり、また言葉がわからずどこに行けばいいのかわからない状態に陥ったことが報道されていた。このような実態を鑑みて、防災に関する授業を行い、生徒が防災に関連する日本語を学びながら、災害が起こる前や災害時にどのように行動すべきかを学ぶ機会を設けた。

(2) 実践報告

【導入】

生徒に「災害」とは何かを問い、台風や地震、津波を指す言葉であることを確認した。そして今後、日本では大規模な地震が起こる可能性があることを伝えた。

【展開1「避難すること」】

「この教室で地震が起こったら、まず何をするか。」と発問した。それと同時に生徒らの母国での地震発生時の対応を尋ねてみると、日本と同様に机の下に隠れる、落下物に当たらないように壁際に寄る、家屋が倒壊することを考えてすぐに家の外に出るなど様々な回答があり、生徒も他国の対応策に関して興味を示していた。

次に「学校の外もしくは自宅で地震にあったら、何をするか。」と発問し、大阪府北部地震でのブロック塀倒壊による死亡事故のニュースとともに、屋外の建造物の危険性を確認した。その後、「避難するときに気をつけることは何だろう。」という学習課題のもと、テレビやラジオなどで正しい情報を聞いて避難することやガスの元栓を閉めること、荷物は必要なものだけ持っていくことなどを理解させた。

次に、生徒を数人のグループに分け、避難場所や避難所を探す作業に取り組みさせた。その際に「千葉県防災マップ」を活用した。「避難場所」と「避難所」のマークを生徒に示し、防災マップ上からマークを見つけて印をつけさせた。そして避難場

所・避難所の数や、どのような施設が設置されているのかを捉え、もし学校の外や自宅で災害にあったときにどこに避難すればよいのかを理解させた。

【展開2「日頃、準備すること」】

日頃の準備として、非常食や懐中電灯等の非常持ち出し品を確認させた。その際に、学校に保管してある災害備蓄品を借りて実物を生徒に示した。また教室から出て、廊下の掃除用具入れが転倒防止器具で留めてあることや、校内の自動販売機が災害救援用となっていることを確認させた。

【展開3「家族に伝えること」】

最後に、今回の授業の内容を自分だけの理解に留めるのではなく、家族にも教えることの重要性を伝えた。もしものときに必要以上に混乱しないように、どこへ避難するのか、誰が何を持って避難するのか、家族がどこに集まるのか、家族とどのようにして連絡を取るのかなどを考えさせた。

さらに生徒自身がそれぞれの家庭環境の中で、より正確に必要な情報を伝えることができるように、その方法を生徒に伝えた。千葉市が作成している「外国人のための防災ガイドブック」や、その内容について、より理解を深めるための動画版（英語・中国語・韓国語）を紹介した。これらはいずれも同市ホームページ上の「外国人のための防災ガイドポータルページ」から詳細を確認することができる。

【生徒の反応】

災害が起こったとき、何かあったら「避難する」ということは理解していても、どこにどのようにして避難するのかという観点までは整理できていない生徒が多かった。話を聞くだけではなく、防災マップから避難場所・避難所を探す、災害備蓄品を実際に見てみる、教室の外に出て災害対策を確認するなどの活動に取り組んだので、積極的に授業を受ける姿勢がみられた。

また今回の活動を通して「分かったこと」や「家族に伝えたいこと」を書かせると、やはり災害が起こる前の準備をしておく、特に家族とよく話をしておくなどといった内容が多かった。生徒の記述を通して、今回の取組の目標をある程度達成できたのではないかと感じた。

(3) 教材化のポイント

日本語指導を必要とする生徒の生活環境や教育歴は多様である。なるべく平易な日本語を用いることに加えて、「高校生だから知っているだろう」ではなく、また地歴・公民科や理科の授業ではないので、あくまで基本的な事項・事柄を扱うことを心がけた。生徒たちのこれまでの生活経験や学習経験を踏まえた学習の動機付けを意識している。

例えば、6月の梅雨の時期にあわせて日本の気候を学習したり、冬季休業前の時期に「なぜ日本は除夜の鐘をつくのだろうか、なぜ年越しそばをたべるのだろうか」と

いった視点から日本の文化を学習したり、より効果的な指導ができるよう適切な時期に実施したりするように気をつけている。

外国につながる生徒が身につけるべき技能は、単に「日本語」を学ぶだけではなく、日本語学習を通して彼らの日常生活に必要な情報や方法・手立てを学ぶことも大切なのではないかと感じる。そういった意味では、防災教育ということで地歴・公民科と連携した今回の取組は、意義のある教材開発であったと考えられるし、また今後は学習課題に工夫を凝らし、それによって例えば理科や国語科との連携も検討していけるのではないだろうか。

<参考資料>

○千葉県防災マップ

<http://www.city.chiba.jp/somu/kikikanri/bousaimap-japanese.html>

○（千葉県）外国人のための防災ガイドポータルページ

https://www.city.chiba.jp/somu/shichokoshitsu/kokusai/bousaiguide_portal.html

4 各教科の授業における指導の充実

本調査研究のねらいに、「それぞれの日本語能力に応じた適切な学びを提供することで、自己肯定感や学習意欲を向上させるとともに、日本語能力及び基礎学力を確実に定着させる」こと、また「個に応じた指導を充実させる」ことが挙げられている。その意味で、各教科の授業における指導の充実は日本語指導の充実と共に、調査研究の結果として具体的な中身が求められる。しかし、性急に結果を求めることは本事業の趣旨にはそぐわない。時間をかけた丁寧な検討が必要である。

一方、日々様々な事情を抱えながら学ぶ生徒へのケアや対応に追われる定時制高校の実態からすれば、支援が必要なのは日本語指導を必要とする生徒に限られないという職員の率直な声もある。しかし、日本語指導を必要とする生徒への支援は重要な教育課題の一つであり、定時制高校という場であるからこそより鮮明に見えてくる生徒の姿があり、定時制高校の職員だからこそ語りうる指導・支援の在り方があるのではないかと考える。

このような視点から、千葉県立市川工業高等学校及び千葉県立生浜高等学校において次のような取組を行った。

(1) 千葉県立市川工業高等学校の取組

ア 実施内容

今年度は生徒の実態の把握に努め、職員全体で内容の共有を図る。その中から支援の課題を明らかにし、対応の方向性を見いだす。

イ 実施方法

生徒本人、職員（特に教科担当、HR担任）、教育相談員等に聞き取り、生徒が日常の学習や高校生活のどこでつまづいているのか、どんな支援が必要か等を明らかにする。また、授業担当者やHR担任はどんな工夫をしているか等を明らかにし、職員で情報を共有する。

職員研修等の場で生活言語と学習言語の違い、思考言語の形成、学習言語習得のプロセス、授業における工夫と配慮等について職員が学習を積み重ねることが大切である。その結果、すべての職員が一定の知見を持ち、多様な個別のニーズに対応したきめ細かい指導ができるようになることを目指す。

ウ 実施上の留意点

生徒ごとに事情が異なり、誰にどこまで聞き取ればよいか客観的な基準が定めづらい。また、質問の場を設けるには人的、時間的な制約がある。丁寧なプロセスと配慮が求められる。

今年度は以上の内容に集中して取り組み、授業における指導の充実にむけた検討等については次年度以降時間をかけて行う。授業等における指導・支援方法の検討や具体的な教材開発等は次のステップとする。

エ 授業における配慮や工夫（職員アンケート結果から）

千葉県立市川工業高等学校で実施した職員アンケートの中で、授業における工夫や配慮していることについて、以下のような回答があった。

- | |
|---|
| <p>① 授業等（学習指導）において気づいたこと、困っていること</p> <ul style="list-style-type: none">● 日本語の理解が浅いため、実習において安全のための指導がうまく伝わっておらず危険だったことがあった（1年生徒）。● 本人が実習内容について理解していなくても「理解した」ということが多いため、指導がさらに難しく感じる（1年生徒）。● 「わかっている」と本人は言っても、どこまで何がわかっているか理解しにくい（2年生徒）。● 日本語で話す内容が分からないためか、なかなか顔を上げてくれない。アプローチが難しく感じる。ワークシートの作業なども乗り気でないようだ（3年生徒）。● 定期考査問題で設問の意味、答え方（言葉を記入するのか番号を記入するのか）が分かっていない（3年、4年生徒）。● 個別に時間が取れる時は日本語でやりとりしながらワークシートの作業はできるが、一斉授業の中では難しい（4年生徒）。 <p>② 授業等で工夫していること</p> <ul style="list-style-type: none">● ワークシート、板書、考査問題の漢字にふりがなをつける。● 授業についての質問や分からないことを記入させ提出させている。● 実習における危険性を分かりやすい言葉で伝えるよう心がけている。● 実習で説明した内容について本人に説明させることで、理解しているか確認している。● 授業で扱うキーワードについて、英語では？中国語では？と生徒に質問して確認している。できるだけ生徒に読んでもらい、互いに聴き合う。● ワークシート等でニュースや話題を扱うとき英語、中国語、スペイン語等の訳を併記する。● 自分の考えや感想を書く課題については、できるだけ母語で書いてもらうようにしている。翻訳については言語別に日本語相談員の方をお願いしている。 |
|---|

オ 定時制高校における授業の現状と課題

本校に限らず定時制高校の各教科の授業においては、生徒の実態に配慮した内容や指導が工夫されている。不登校経験者が多数を占める今日の定時制高校において、中学校までの学びが十分でない生徒は多く、人間関係に敏感で教室で安心して学習に集中できない生徒も多い。学習歴、生活歴も多様、入学前の学びの内容もそれぞれ

れ異なる中、一人一人への配慮は必要なことである。では日本語による学習に困難をかかえる生徒についてはどうであろうか。日常会話については日本語をある程度使えても授業の内容についてはほとんど理解できない生徒は多い、授業についていけず学校から足が遠のく、授業には出席していても何もわからない状態で過ごすといった生徒の実態が少しずつ職員室の話題に上るようになった。このこと自体は一年間の取組の成果とも言える。

また、職員アンケート等を通じて、日本語による学習支援が必要な生徒に対して、授業担当者がそれぞれの方法で工夫・配慮を行っていることも知ることができた。特に工業に関する実習等においては、危険を伴う場合もあり、作業の内容や注意すべき点を分かりやすく、繰り返して伝えることの重要性も共有化された。こうした職員各自の取組の交流をさらに追求したい。

- まず、生徒が困っていること、教員が困っていることを溜めていくことが大切である。
- 教員の視点は別々だ。生徒が何を分かっているのかが分からない。最初はそれを出し合うことが大切である。
- まず、それぞれの教員から見た生徒個々の実態を洗い出してみる。それらをもとに教員間で意見交流を図る。そこから見えてくるものは何か。また、学校としてどう対応するか。このような流れが大切である。

これらは助言者の新倉先生が検討に際して指摘されたことである。また、授業については、生徒のレベルまで教員が降りていくことを繰り返し強調している。

日本語の学習ではなく日本語による学習支援を求めている生徒に対して、それぞれの授業等の中で担当者である教員がどう応えるか、一人一人に大きな課題が投げかけられたわけだが、それは新しい方法、効果的な方法を考え出したり、他所から借りてきたりするということではないと考える。基本は生徒との対話（生徒の母語、そして日本語）を通して一人一人の学びのニーズと希望を教員が知ることであり、その「センス」と姿勢が教員に求められている。

カ 次年度以降に向けた課題と留意点

- (ア) 生活言語と異なり学習言語の習得には長い年数を要することを教員間で共有し、それぞれの授業のすすめ方を見直し、必要な工夫や配慮について考える。
- (イ) 既に授業で行っている工夫や配慮をさらにまとめ、それぞれの授業に応じて活用が図れるようにする。
- (ウ) 国語や数学等の普通科目と工業系の専門科目に大別し、それぞれの科目における指導上の課題や教科につながる日本語指導の在り方を考えていく必要がある。
- (エ) 工業高校の日本語学習支援の在り方について、現在行われている授業の工夫や

配慮をまとめて全体化していくことが求められる。特に危険をともなう工業の実習科目における配慮事項は重要である。

(オ) 言語別教育相談員の協力を得ながら、授業等での日本語による学習サポートをさらにすすめる。

(カ) 授業等の学習や高校生活、進路等で困っていることについて、日本語指導員による聞き取りやサポートを引き続き行う。HR担任等との連携を密にする。

(キ) 授業に限らず高校生活の様々な場面で、生徒の背景に配慮するとともに、生徒の文化や母語を尊重し生かす。可能であれば文化的交流の場を追求する。

(2) 千葉県立生浜高等学校の取組

本校には多数の外国につながる生徒が在籍しており、日本語指導が必要な生徒に対し、学校設定科目として「日本語基礎」を設定し、中国語やフィリピン語を母語とする生徒に対して、外国人児童生徒等教育相談員が日本語基礎の授業での入り込み指導や、保護者面談での通訳などを行っている。これらは日本語指導としての支援であるが、生徒の学校生活の中心がその他の授業であることから、各教科指導での支援も大変重要となる。日本語指導が必要な生徒が日本語以外の教科を学習する際、第2章1

(1) で整理したように、各教科の教員が様々な課題を抱えた中で、それぞれ独自に創意工夫を行ってきたことが見えてくる。

前述した教員対象のアンケートから、各教員が工夫している点を回答の多かった順に分類すると次のようになる。

- 漢字にルビをふる。
- 個別に対応し、平易な日本語等で説明する。
- 英語での説明を取り入れる。
- バイリンガルの生徒にサポートをさせる。
- 記述など、母語の使用を認めている。
- テストではなく提出物や授業態度で評価をしている。

以上、多くの教員が様々な工夫を独自に行い、現状に対応していることが読み取れる。しかし、それらの工夫やその問題点等を情報共有する場や議論をする場はこれまで特に設定されてこなかった。そこで、次年度の取組として、各教員が独自に持っているノウハウの共有やこれらの問題について議論する場を設定する必要があると考える。例えば、会議形式、相互授業見学、日本語学習支援等検討委員会からの情報発信など様々な方法で実施することが可能である。

しかし、同時に上記のような授業内での支援だけでは不十分であるという点も注意したい。アンケート結果にあるように、授業をまったく理解できていない生徒も在籍しており、中にはそれが原因で学校から離れていってしまう生徒もいる。

“分かる”ことが次の学びへの意欲に繋がり、学びをより深いものにしていく。この視点から現状を顧みると、授業をまったく理解できていない生徒が意欲を失ってしまうのは当然のことかもしれない。学びの主体が生徒である以上、生徒のやる気を何とかして引き出すことは必須だろう。そのためには、まず何よりも授業を理解させて、“分かる”という実感を持たせたい。但し、この授業をまったく理解できないことに関しては、日本語だから授業が理解できないのか、授業の内容そのものを理解できないのかを見極めることが重要である。

また、教科指導の中での日本語指導の在り方についても考えたい。学校生活の中心が授業であることから、各教科の授業が生徒の日本語習得に与える影響は大きい。日本語基礎だけではなく、教科指導の中でも生徒が日本語を習得するための工夫が必要であるという視点を教員間で共有できるよう働きかけていく必要がある。

5 多文化理解教育の充実

千葉県立生浜高等学校では、学んだ日本語を活用する場面として母国の文化等について発表する機会を設けている。「日本語基礎」が設定された平成27年度から、授業の受講生を中心に千葉県高等学校定時制通信制総合文化大会（以下、定通文化大会）へ参加している。また平成29年度から、同内容を生浜高校の文化祭である「しほた祭」で全校生徒に向けて発表する場を設けている。さらに平成30年度は、「日本語基礎」授業内でも発表する機会を新たに設け、生徒・職員の参観を募った。以下、今年度の取組を整理する。

(1) 取組概要

表5-1 平成30年度の取組（千葉県立生浜高等学校）

名称	開催日時	開催場所	発表時間
第56回千葉県高等学校定時制通信制総合文化大会	平成30年10月13日(土)	千葉県立長生高等学校	20分
第41回しほた祭	平成30年10月27日(土)	本校体育館	10分
「日本語基礎」授業内	平成30年10月31日(水) 6・8限	本校社会科講義室	各45分

(2) 参加者

「日本語基礎」受講生及び本校生徒、教職員

(3) 指導方法

ア 定通文化大会

(ア) 発表の準備期間

平成30年9月5日(水)～8時間の授業(45分×8コマ)

(イ) 目標設定

「日本文化を学ぶだけでなく、今回は母国の文化を私たち日本人にも教えてほしい」と目標を設定した。

生徒の母語を生かすためには、「日本語を学ぶだけでなく、母語を使うことも大切である。」ことを丁寧に説明し、定通文化大会への取組の意義を確認させた。

(ウ) 発表内容

発表する母国の文化等の内容については、生徒自身でまとめさせた。その際に前年度の発表を映像で紹介し、取組に対する目指すべき到達点のイメージを共有させた。発表グループはできる限り同じ出身国で分けたが、それが適わない場合は、共通する言語・文化等を基に作成した。本校に与えられた発表時間は20分

で、全5グループできたため、1グループあたりの時間は4分程度となった。

(エ) 指導方法

準備期間は主にパソコン室を利用した。発表の形式はパワーポイントを活用し、スライド内に発表内容を母語によって紹介させ、それを翻訳した日本語の文章も加えた。スライドのデザインやアニメーション等に工夫をするように指導をした。

スライドが完成したグループから、発表に向けてプレゼンテーションの指導を行った。4分間の限られた時間を最大限活用するため、場合によっては発表内容を精選するように指導をした。ほとんどのグループが8時間の準備時間で完成しなかったため、適宜休み時間等を利用して指導を行った。終了後、参加生徒を対象としたアンケート調査を実施した(添付資料3)。

イ しほた祭

発表時間が10分程度であったため、定通文化大会での発表形式をそのまま取り入れることができなかった。そこで、発表は定時制午前部・午後部・夜間部全ての生徒が関わる中国グループと、歌とダンスを取り入れたネパールグループに限定した。

ウ 「日本語基礎」授業内

定通文化大会の後、しほた祭で本校生徒向けに発表の場を設けたが、今年度は発表のグループを限定したこともあり、参加した生徒たちから「もう一度発表をしたい。」という申し出があった。そのため、「日本語基礎」授業内で全てのグループが公開発表を行うことになった。発表に際し、改めて定通文化大会での成果と課題を振り返らせ、プレゼンテーションの内容・方法において何が大切なのかを確認させた。終了後、参加生徒を対象としたアンケート調査を実施した(添付資料4)。

(4) 本取組における発表内容

表5-2 各グループの発表内容

グループ	発表内容
中国	国旗, 地図, 料理, 民族, 構造物, 動物等
フィリピン	国旗, 国歌, 花, 伝統的な遊び等
ネパール	国旗, 料理, 宗教, 観光地, 歌, 民族ダンス等
アフガニスタン・バングラデシュ	国旗, ラマダン等
コロンビア・ペルー	国旗, 地図, 料理, 歴史

全体的な傾向として、母国の基本的な情報である「国旗」や身近な「料理」を扱うグループが多い。「国旗」については単純な紹介にとどまらず、国旗が示す意味をまとめたグループが多くみられた。全てのグループで、生徒独自の視点による各国の特色

がよくわかる内容であった。

(5) 次年度への課題

生徒に行った事後アンケートをみると、母語を活用すること自体に困難さを抱える生徒はほとんどいなかった。日本語での発表では、約半数の生徒が大変だったと感じていたが、簡単な日本語で表現することにより困難さを回避した例も示された。ただし、発表前の練習や発表時のパフォーマンスについて生徒に自己評価させたところ、準備不足が露呈していたにも関わらず、8割近い生徒が及第点をつけていた。今後は、定通文化大会に関する取組への生徒自身の目標設定を見直す必要があると思われる。

本取組の成果の一例を以下に示した。

- 滞日期間が長くなり母国のことを忘れていたフィリピン出身の生徒が、生徒同士で話しているうちに母国での出来事を思い出すことができた。
- アフガニスタン出身の生徒がこれまで漠然としていたラマダンについて調べた結果、その意味がその生徒のなかで初めて明確化された。
- あるフィリピン出身の生徒は自発的に校内の日本人生徒に自身の原稿の日本語文章の添削を依頼するなど、日本人生徒と外国につながる生徒の交流が図られた場面もみられた。

「日本語基礎」授業内での発表後、定通文化大会の振り返りとあわせて発表の内容や方法についてさらに指導した結果、「日本語基礎」授業内での発表の生徒自身の自己評価は、定通文化大会の発表と比べて良い傾向がみられた。特に、自己肯定感の認識については、生徒の自己評価だけでなく教員側からもその向上が確認された。今回の取組を通して、外国につながる生徒が彼らの学校生活のなかで日本語を学びながら、ときには母語を活用した活動をすることの有用性を確認することができた。しかし、母語を活用した母国の文化を紹介するのみでは、異文化理解教育を充実させることとはならない。上述したように、活動後に生徒に自己評価の機会を設ける事、さらに経験したことを言語化するなどの取組が必要となる。

6 専門家による研修会の実施

(1) 第1回職員研修

ア 日時

平成30年10月19日(金) 午後2時～午後3時

イ 場所

千葉県立市川工業高等学校 視聴覚室

ウ 講師

千葉大学名誉教授 国際未来教育基幹 新倉涼子先生

エ 参加者

千葉県立市川工業高等学校職員25名, 千葉県立生浜高等学校職員5名, 学習指導課2名

オ 内容等

(ア) 研修会タイトル

「定時制高等学校における日本語指導を必要とする生徒への支援の課題と対応」

(イ) 講話概要

○千葉県における在留外国人をめぐる状況

千葉県は全国の中でも5～6番目に在留外国人の登録数が多いが、国籍に偏りがなく、満遍なくいろいろな国の人たちが中長期に渡って滞在しているという特徴がある。しかし、帰国の予定には明確な見通しがなく、新倉研究室が平成21年に千葉市との共同研究事業で実施したアンケート調査においても「できるだけ長く住みたい」(44.9%)「わからない」(34.5%)という人が多数を占めている。こうした見通しの立たない滞在期間の長期化という状況下で、親の国際移動に伴って来日した「外国にルーツを持つ子供」たちの義務教育から高等学校への受け入れの課題が生じてきている。

○外国にルーツを持つ子供とは

「外国にルーツを持つ子供」と一口に言っても、彼らの抱える背景は大きく異なり一様に捉えることは難しい。国籍の面から見ると、大きくは「外国籍の子供」, 「日本国籍で、両親のいずれかが外国出身の子供」, 「不就学の子供/無国籍(法的に認知されていない)子供」に大別される。国籍以外の面でも、彼らの在日パターンには様々なバリエーションがある。来日の時期(文化間移動をし第二言語に接触した時期)は思考することばの獲得に大きく関わる。そのため、彼らの来歴(どこで、どのような教育を受けたか)の把握は重要である。一般に0歳～5・6歳(思考の基礎づくりの時期)に来日した場合、母語喪失の可能性が高くなる。7・8歳～9・10歳(具体的事象に基づいて論理的思考を発達させる時期)で

の来日は、思考する言語を獲得しやすく、ダブルリミテッドになるリスクが高まる。11歳以降（論理的・抽象的思考が形成される時期）の来日では、母語保持の可能性は高まるが、第二言語（日本語）での学習ができるまでに時間を要するため、教科学習の内容が高度化する中学校・高校での学習に課題が生じやすい。いずれの時点に来日したにせよ、第二言語の接触時点で第一言語がどの程度発達しているか、言い換えれば「頭の中で物事を考え、思考を支えるために必要な言語が年齢相応にあるか。」「理解する・判断する・論理的に物事を考える認知機能はどの程度発達しているか。」のチェックが必要である。

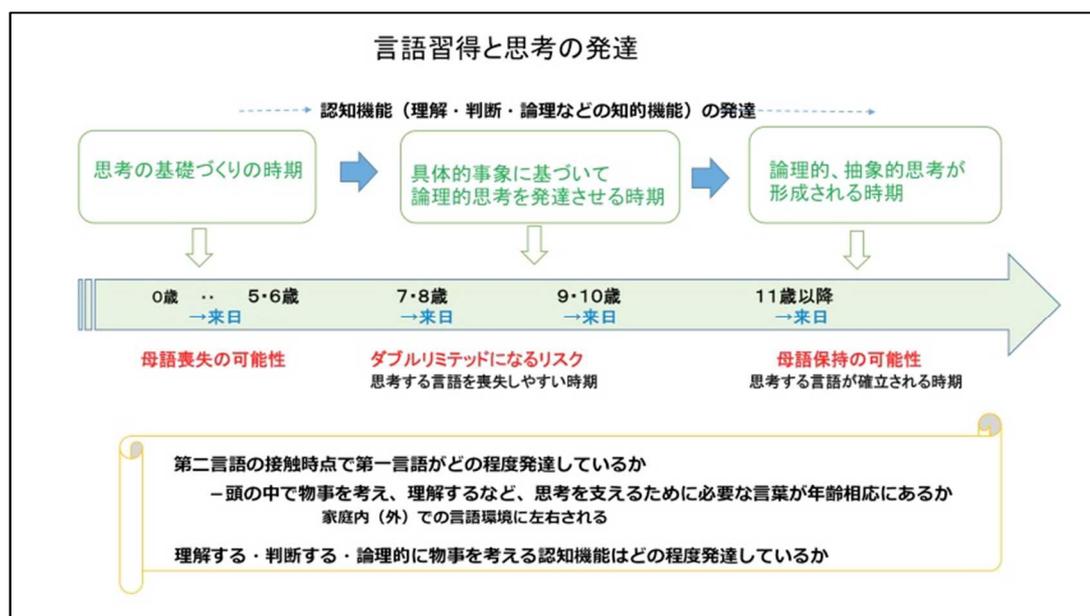


図6-1：言語習得と思考の発達（研修会当日スライド資料より）

○高等学校での学習支援—どのように見立てるか—

高校での指導・学習支援においては、まず支援の前提として、生活環境・教育歴・日本語の力・母語の力・学力の程度・パーソナリティといった様々な側面からの情報を収集し、当該生徒の支援に先立つ「見立て」を長期的視野に立つて行うことが肝要である。

「見立て」をする		さまざまな側面から生徒を見立てる 長期的視野に立った見立てを行う
生活環境	<ul style="list-style-type: none"> ・何歳で日本に来たのか、来日してどのくらいか ・家族構成 ・父親・母親の国籍、職業、 ・来日の目的、在留の種類(潜在ビザの種類) ・親の教育観、教育への関心度 	
教育歴	<ul style="list-style-type: none"> ・何処で、何歳まで教育を受けたか。 ・どのような教育を受けたか 	
日本語の力	<ul style="list-style-type: none"> ・ほとんどできない、片言だが意思疎通は可能 ・日常会話は不自由しない 学習に必要な日本語力はあるか など 	
母語の力	<ul style="list-style-type: none"> ・親とは何語で話すか、共通言語はあるか 親の言語で自分の思いを伝えられるか 	
学力の程度	<ul style="list-style-type: none"> ・思考言語が確立されているか ・現在の学力の評価 ・評価には表れていない、潜在的にもっていると思われる学習する力はどうか 	
パーソナリティ	<ul style="list-style-type: none"> ・言語・文化の違い、不慣れた環境への移行初期での性格判断のむずかしさに留意 	

図6-2：支援前の「見立て」の観点（研修会当日スライドより）

指導の前提となる「見立て」は概ね以下のようなプロセスで実施する。まず、図6-2のような観点から多角的に生徒情報を集め、見立てシート(個人シート)を埋めていくことで、教師自身が知らない情報に気が付き、自分が生徒の何を知らないのか、なぜ知らないのかを明確にし、そこから知らない情報の中でどうしても必要な状況は何か、その必要な情報をどのようにとるのかを検討していく。次に、得られた情報を多角的に分析し、彼らが書ける問題の複合要因を見極めていく。その上で、長期的視点に立ち、生徒にとって現時点で必須と思われる課題を見極め、指導方針・指導計画を作成していく。その際には、指導内容を重点化することが求められる。限られた時間・人員のなかで行う指導の内容と量を調節しなければならない。生徒の日本語力と教科学習との連動においては、実質的には、日本人生徒に教えるべき全内容の何をどう教えるか、言い換えれば、指導内容のうち「どれを切るか」を判断することが重要である。こうした見立てのプロセスを通じ、教師自身の「見立ての勘」も磨かれていく。

○指導の課題と対応

高等学校の指導においては、まず指導の前提としての「見立て」を行うとともに、生徒のニーズや将来の見通しを加味しながら、認知発達に見合った指導、学力と思考言語の同時伸長への支援、子供の心理的適応を視野に入れた支援、表層の文化の背景にある歴史的・社会的な意味、概念の理解を促すことが求められる。

カ 研修会事後アンケート調査

研修会後に、職員を対象に事後アンケート調査を実施した。アンケート結果は、第2章1(2)にまとめたとおりである。ここでは、結果の概要のみをまとめることとする。

研修会事後のアンケートからは、主に外国人生徒の指導の「見立て」のために、生徒をめぐる多角的な情報を収集することの必要性が実感されていることが見受けられた。特に、生徒指導・進路指導の観点から生徒の国籍や在留資格の把握の必要性に関する意見が多く見られた。しかし、多数の教員がこうした個人情報や学校側が把握できるのか、把握時にどのように説明するのかを懸念しており、生徒情報の取得・管理をめぐる条件整備やガイドラインの必要性が浮き彫りとなった。卒業後の進路として「就職」を選ぶ生徒が多い夜間定時制高校の特性上、生徒の進路の問題に在留資格の情報は必須事項であるに等しい。しかしながら、身分にかかわる情報を把握していないが故に、適切なタイミングで、適切な進路指導が行えないという状況が生じているのもまた事実である。

他方、学習支援・教科指導に関することでは、多くの先生が日本語指導と教科指導の連動の必要性を感じているものの、現実には「日本語指導の難しさを再認識し、何からどう取り組めば良いのか逆にわからなくなった」という意見に代表されるように、日本語指導の専門知識を持たない教員でも自分の専門教科の指導の充実に取り組めるようにするためには、着目すべき点や考慮すべきポイント等の提示が求められる。特に、教科指導における指導の充実においては、教員個人の頑張りによだねるものではなく、生徒の学習ニーズを踏まえた学校全体での指導目標の設定、見立ての項目の検討が必要となるだろう。

キ 職員研修会を終えて

質疑応答の際には教員から「外国にルーツを持つ生徒を支援したい気持ちはあるが、支援対象となる生徒の多くが欠席がちである。生徒が学校に来なければ手の打ちようがない。」という意見が出された。本校は夜間定時制の工業高校であり、始業前にアルバイト・仕事をしている生徒も多い。学校全体を見渡すと、外国人生徒に限らず、仕事のために欠席を重ね、そのまま学校から足が遠のき中途退学にいたるケースも少なくない。欠席時数が多い生徒に対し、教員は根気よく来校をうながすが、そうした働きかけが響かずに学校から離脱していくケースは決して珍しくない。このように外国人生徒のほかにも広く生徒対応が求められるなかで、現実的には、外国人生徒のためだけの個別対応をするのは難しい、何から手をつけていいかわからない、というのが教員の本音であろう。そうであるならなおさら、指導内容をどのように焦点化するか、言いかえれば授業の中で「何を切るか」の判断を教師一人一人が自己の専門科目の中で根拠を持って行えるようになるかが問われているよう

に思われる。

(2) 第2回職員研修

ア 日 時

平成31年1月18日(金) 午後1時30分～午後2時30分

イ 場 所

千葉県立生浜高等学校

ウ 講 師

千葉大学名誉教授 国際未来教育基幹 新倉涼子先生

エ 参加者

千葉県立生浜高等学校職員27名, 千葉県立市川工業高等学校職員4名
学習指導課2名

オ 内容等

(ア) 研修会タイトル

「定時制高等学校における日本語指導を必要とする生徒への支援の課題と対応」

(イ) 講話概要

○学校現場の多国籍化, 多民族化

20年～30年前よりこの現象は起きていたが, この傾向がここへきて強くなっている。その中で現状としては個々の教員や学校現場での応急的・治療的対応にとどまり, それによって現場の教員は混乱・困り・疲労を強く感じるようになり, そしてあきらめに至っている。とは言え, 外国にルーツを持つ生徒が入学してくる現状は避けられない。それなら, この現状をポジティブにとらえることが大切である。それは外国にルーツを持つ生徒にとっても日本人の生徒にとっても「違い」から自分を見直すことにつながり, 異文化適応能力等を育てていく機会になり得, 双方にとってプラスになるととらえることができる。

○在留外国人の状況

平成30年6月末現在, 2,637,251人が日本で暮らしている。これは年々増加している。持っているビザの種類も様々で, それによって外国にルーツを持つ生徒の進路に大きな影響が出ることから, 進路指導において生徒が持つビザの種類を把握しておくことは重要である。例えば生徒本人が家族ビザを持っている場合, 就職はできない。そこでこれを高校在学中に変更することが必要である。また, 在日年数は3～6年が最も多く, この先については帰国時期がはっきりしていない人が圧倒的で, そのことが生徒の進路等にも影響することから, 保護者の意思や状況を, 保護者と学校で共有しておくことが望ましい。

○外国にルーツを持つ子供とは

高校に通学しているのは「外国籍の子供」「日本国籍で、両親のいずれかが外国出身者の子供」のどちらかである。このうち、日本語指導が必要な外国籍の児童生徒は34,335人、日本国籍の児童生徒は9,612人いるといわれている。その言語も多様化している。また彼らの在日のパターンは個々に違っており、どこまで何をわかっているのかが気付かれないことも多い。

そこで、教員に必要なことは「見立て」を行うことである。まずは生徒や家族の生活環境や日本語の力、母語の力についてなどを知ることが重要である。しかしながら、個人情報の保護の観点から聞いてはいけない事柄も多い。そこで、重要になっているのが個々の教員の力であり、生徒や保護者とよりよい人間関係を作ることによってこれらのことを聞き出す必要がある。それと同時に外国にルーツを持つ生徒に生じうる特長的要素を把握した上で、見立てを行い、指導内容の重点化を図ることが重要である。

○指導の課題と対応

生徒の発達に見合った指導を行うこと、学力と思考言語の同時伸長への支援、子供の心理的適応を視野に入れた支援、表層の文化の背景にある歴史的・社会的な意味や概念の理解、日本人生徒との協働学習などが必要になってくる。最も大切なのは、「知りたい」と思う気持ちを引き出すことと、日本人生徒が彼らを仲間として受け入れることであり、それを教員が支援することである。生浜高校のホームページから、生徒が「楽しい」「丁寧に教えてくれる」と感じていることが伺えるので、今後はこれに見立てをしてから再び授業実践につなげてほしい。

7 他都県の先進的な取組の視察報告

(1) 神奈川県立相模向陽館高等学校（単位制定時制の課程・普通科）

ア 日時

平成30年12月6日（木）

イ 訪問者

千葉県立生浜高等学校：5名

千葉県立市川工業高等学校：1名

ウ 内容等

(ア) 在籍生徒について

在籍生徒約560名のうち、2割程度（中国、フィリピン、スペイン、ポルトガルの生徒が多い）が外国につながりを持つ生徒である、そのうちの半数程度が日本語指導を必要としている生徒である。外国人労働者の増加（横浜、川崎、湘南、厚木など）に伴い、その子供が多く在籍している。

(イ) 入学者選抜について

募集280名のうち20名が外国人特別選抜である。問題は一般受検と同様だが、文字の拡大やルビが振られている。内訳については、学科試験50%、面接試験50%である。面接は日本語で実施され、たとえほぼ答えることができなかつたとしても、面接に対する姿勢やその他の要素を総合的に考慮して判断される（これまでに不合格者はでていない）。また、外国人特別選抜の条件に合致しない場合でも、事前申請及び一定の判断基準により、一般募集で同様の配慮を受けることが可能となっている。

(ウ) 入学前の対応について

9月～10月にかけて、日本語を母語としない生徒のための高校進学ガイダンスを他校と連携し、県内会場で6回実施している。さらに、12月には学校独自で同様の説明会を実施している。各会場には、NPO等に依頼し、通訳可能なスタッフを用意している。

また、3月下旬にはプレイスメントテスト（日本語をどの程度理解できるのかを調査するテスト）を実施し、入学後のクラス編成等の判断材料としている。当該テストの受験は希望制であり合格者説明会等で告知している。テスト内容は日本語能力試験（JLPT）から抽出し、独自問題を付加したものとなっている（概ねJLPT5～3級程度の文法問題と作文で構成されている）。独自問題では、例えば、各教科の授業を想定し、その中で扱われる「新出語」に関する説明を日本語で読み、正しく理解できているかを問うような問題が用意してある。

(エ) 入学後の対応について

入学の前後で、海外生活、在留資格、日本語支援が必要かどうかなどについて

調査を実施し情報を集約している。在留資格については、変更する場合もあるため、毎年確認し、その都度情報を更新している。

また、学校設定科目である「日本語」（1～4年次まで）を設けており、非常勤講師等を活用した2名体制で行っている。「日本語」を選択した生徒は、芸術、体育を除いた他教科についても別枠での授業（取り出し授業）が用意されている（ただし、3年次以降は日本史のみ）。

（オ）その他

【保護者へのアプローチ】

文書等について、平易な日本語による通知を行っている。

【職員へのアプローチ】

外国につながる生徒の情報を教員間で共有している。

また、職員研修も実施している。

【教員数と持ち時間について】

教諭は70名程度で、一人あたり週16時間の持ち時間としている。

（LHR・総合的な学習の時間を含む）

その他に、非常勤講師が29名在籍している。

【居場所カフェ】

週一回校内において、NPO協力のもと生徒の課題・問題の早期発見と支援、多文化共生、キャリア支援等を目的としたカフェを実施している。飲食物に関しては、フードバンクより提供を受けている。

<参考>

- ・運営団体 : NPO法人多文化共生教育ネットワークかながわ
- ・飲食物の提供 : フードバンク
- ・事業コンセプト : 生徒の課題・問題の早期発見と支援、多文化共生、キャリア支援

（2）東京都立六郷工科高等学校（定時制課程）

ア 日時

平成30年10月26日（金）午後3時30分～午後6時30分

イ 訪問者

千葉県立市川工業高等学校：5名

ウ 内容等

（ア）視察内容

東京都立六郷工科高等学校（定時制）における「日本語教室」をはじめとする外国人生徒への支援体制について、放課後日本語指導の視察、外国人生徒が在籍する学級の通常授業の視察、担当教員との懇談を行った。

(イ) 視察の目的・観点

東京都立六郷工科高等学校は定時制の課程に生産工学科を置き、外国人生徒が多数在籍している状況にある。夜間定時制の工業高校という特色から本校と近い状況にあることが予想され、外国人生徒の支援体制、特に、入学後のサポート体制、指導上の課題、特別な配慮等について、実際の授業場面等の見学、担当者との懇談により、本校での取組や本事業についての示唆を得る。

(ウ) 視察校の特徴

○学校の種別・課程

全日制・定時制を併置し、定時制に普通科と生産工学科が置かれている。生産工学科では、工業科目を中心に「ものづくり」学習を行い、興味・関心に応じて資格取得などの指導も行っている。単位制の高校であり、資格取得が単位認定されるほか、6年次まで在籍が可能である。

○履修

定時制の課程は4時限(3～6時限)を履修し4年間での卒業を基本とするが、選択授業として始業前に設定されている2時限(1～2時限)の全6時間授業を受けることにより3年間で卒業することも可能である。

○在籍生徒数と外国籍生徒の在籍状況

定時制在籍生徒は全体で60名弱

外国籍生徒はネパール人生徒(全学年で7名程度)が多数を占めており、普通科・生産工学科それぞれに在籍している。数年前は外国籍生徒の中でも少数であったが、エスニック・ネットワークの影響からか、ここ数年でネパール人生徒の入学が増えている。

ネパール人生徒は、英語ができるため、日本語があまりできなくても英語でのコミュニケーションにより最低限の意思疎通は図れている状況。しかしながら、地歴公民や国語等の授業における授業理解が難しい。また、生産工学科の生徒では、実習科目で苦勞する場面も見受けられる。

○進路状況

定時制課程生徒の進路については、大学・専門学校等への「進学」はほとんどなく、「就職」が半分、「中退」が半分程度である。就職については、全員が基本的にはハローワークを介して就職活動を行う。学校が大田区にあり、川崎市にも隣接するという土地柄から「就職には困らないエリア」といい、建設関係、飲食、警備関係等の求人多数である。外国人生徒の進路選択も同様の傾向である。

(エ) 先進校の特徴的な取組と成果

○放課後日本語指導(全・定共通)

定時制2時限目(全日制の放課後の時間帯)に全・定共通の日本語講座を開講

している。年度当初は定時制の生徒も受講していたが、10月現在は全日制生徒で日本語指導が必要な生徒が受講している。

日本語指導は、東京都「日本語指導外部人材活用事業」により実施している。視察校では、区内のNPO法人からの人材派遣を得て、外部講師による日本語指導を週2時間行っている。

放課後日本語指導の課題として、人材確保の問題がある。学校が自ら人材確保をするという負担があり、さらに生徒の母語が少数言語である場合、人材の確保が難しい。

○定時制課程における日本語指導

国語・社会の時間に同じNPO法人の人材活用事業を利用し、取り出し指導を実施している。視察日は国語の時間に該当生徒が2クラスに分かれて日本語指導を受けていた。生徒はほとんど日本語ができないため、実際には教科指導というよりも日本語初期指導をせざるを得ない状況にある。

日本語能力の高くない生徒の取り出し授業における課題として、進度調整や、定期考査における評価尺度が問題になりやすい。

○視察校における課題

外国人生徒に対する教育課題として、日本語ができない保護者対応、進路に関する問題、日本語指導の人材確保が挙げられていた。保護者対応では、修学旅行等の学校行事で同意を得なければいけない場面で、日本語ができないために同意を取れないといった事態がある。そうした場面では、本来は通訳をつける等の措置が考えられるが、都の予算では通訳をつけることができないため、職員が対応に苦慮しているという。進路の問題では、就職時にビザの切り替えが必要となる生徒がいるものの、本人や家族がその必要性を理解していないケースも少なくない。教員側でもビザの問題(種別と就労制限)に熟知しているわけではないため、対応が難しい。国籍やビザ、来歴等は、入学時から学校生活上や進路指導上に必要な情報として情報入手をする必要があるものの、どこまで踏み込んで聞けば良いのか、その線引きが難しい。

(オ) 本校の今後の取組の参考となる事項

本県では、日本語を母語としない生徒への支援として、言語対応ができる外国人児童生徒等教育相談員派遣事業が行われている。本校(市川工業高等学校定時制)では、3言語3名の教育相談員の派遣を得て当該生徒への支援を行っている。学校教員が子供の言語獲得や認知発達に関する専門的知識を持ち、体系的な日本語指導を行うことは容易ではない。視察校では、定時制の授業時間帯に外部人材

の日本語指導員が入り込み指導・取り出し指導を実施しており、生徒は体系的・継続的に日本語の学習に取り組むことができる。本校では、「日本語講座」（4単位）として0時限にレインボールームにおける日本語指導を週4回開講しているが、2年次以降の生徒の受講がなく、また、始業前の時間帯ということもあり受講生徒の欠席も目立つ状況にある。全日制の高校と異なり、「放課後」という時間概念が存在しない夜間定時制高校においては、生徒の学習ニーズや学校生活の実態に即した指導内容の選定と指導体制の構築が欠かせない。本研究事業の取組を通じ、本校における体系的に日本語初期指導を実施していくための指導・支援体制づくりや人材活用（主に教育相談員）、指導内容の選定、教科に結びつける日本語指導の在り方について、更なる検討を行いたい。

8 次世代の学習ニーズを踏まえた指導の充実事業検討会議

(1) 第1回検討委員会

ア 日時

平成30年12月12日(水) 午後2時～午後4時

イ 場所

千葉大学 本部棟(事務局) 第三会議室

ウ 参加者

8名 新倉教授, 千葉県立生浜高等学校2名, 千葉県立市川工業高等学校4名,
学習指導課1名

エ 内容

(ア) 職員研修会の報告

第2章6参照

(イ) 先進校視察の報告

第2章7参照

(ウ) 進捗状況と今後の予定

各校の進捗状況を確認し, 今後の取組内容について検討した。

(エ) 報告書作成等について

中間報告書の目次案, 体裁, 作成日程等を協議した。

オ 専門家からの指導助言

本事業の調査研究を進めるに際し, 新倉教授から次のような指導をいただいた。

- 個々の支援計画を作成するにあたり, まず生徒一人一人の実態を把握することが重要である。
- 高校現場の教員のみから見た生徒の実態把握を行い, 支援の在り方を打ち出すことに意味がある。
- 個々の教員によって視点が異なってよい。授業やHR等具体的な場面で気付いたこと, なぜなのだろうと思ったことなどを持ち寄ることから始めてほしい, との指摘をいただいた。

(2) 第2回検討委員会

ア 日時

平成31年2月19日(火) 午後2時～午後4時

イ 場所

千葉県立生浜高等学校 応接室

ウ 参加者

7名 新倉教授, 千葉県立生浜高等学校4名, 千葉県立市川工業高等学校2名,
学習指導課1名

エ 内 容

(ア) 中間報告書について

今年度の実施内容について報告した。

(イ) 事業経費について

修正額の令達日等について確認した。

(ウ) 次年度の事業方針について

今年度の実施内容を踏まえて、2年目の実施内容を検討した。

オ 専門家からの指導助言

新倉教授から、中間報告書の構成等について指導をいただいた。

第3章 まとめ

1 各学校における日本語指導を必要とする生徒に対する指導の現状把握

見立てシート等を活用した生徒への支援体制を構築していくためには、各学校における生徒の現状を適切に把握しておく必要がある。そこで、教員を対象としたアンケート調査を実施したところ、次のようなことが分かった。

- 学習内容を理解できなかつたり、学習に対して消極的であったりすることが、日本語の運用力の未熟さによるものなのか、基礎学力や学習意欲の低さによるものなのかを同定できていない。
- 指導する上で必要となる生徒の個人情報の収集が不十分である。ただし、その内容や収集方法については、今後検討する必要がある。
- 生徒の指導には保護者の協力が不可欠であるが、日本語での説明を理解できない保護者に対して、学校のシステムや状況を適切に伝えるための環境が整っていない。
- 教科指導等において、個々の教員が様々なアプローチを行っているが、その方法が全職員で共有されていない状況も散見される。
- 日本語の学習の必要性など、生徒が現在の状況を適切に把握できていないことも大きな課題である。

以上を踏まえて、2以降の取組を実施した。

2 教員の見立て力向上のためのツール作成

1で実施したアンケート結果から、日本語指導を必要とする生徒への指導を充実させるには、事前に生徒一人一人の状況を詳細に把握しておく必要があることが分かった。調査方法については、聞き取りによる方法や見立てシートを活用した方法等が考えられるが、ここでは見立てシートの活用を前提に、生徒を対象としたアンケート調査を実施した。今回は、生活環境や教育歴、言語能力、学力の程度、パーソナリティを調査項目とした（添付資料2）。

アンケートは、生徒の実態を客観的に判断する材料となっており、これまで行ってきた個人調査票（住所、家族構成等）では分析できない生活環境や学習歴等を把握することにつながられた。また、家族間での共通言語等の調査結果は、適切な支援につなげる上で大変重要な情報であると考えられた。

【次年度の取組予定】

- 見立て項目の精選
- 見立てを行う時期の検討
- 得られた個人情報の管理・活用方法の検討

3 高校生が興味・関心をもって学べる日本語指導教材の開発

一般的な日本語学習用の教材を活用した日本語指導だけでは、必ずしも日本語を学ぶことに貪欲ではない生徒の学習意欲を維持できていないのが現状である。また、日本語の学習を通して、日本語だけでなく日常生活に必要な知識等も学習させることができれば、その効果は更に高まると考えられる。そこで、地理歴史・公民科と連携した防災に関する授業を実施した。

防災マップから避難場所や避難所を探したり、災害備蓄品を見たりすることで、日常生活に必要な知識を学びながら、日本語を学習させることができた。これまでも千葉県立生浜高等学校では、季節ごとに日本の文化に関する学習を取り入れるなどの工夫を行ってきたが、理科や国語科などの他教科との連携をこれまで以上に深めることで、より効果的な指導につながれると考えられた。

【次年度の取組予定】

- 教材化のポイントの明確化
- 他教科（国語科や理科）との連携の検討

4 各教科の授業における指導の充実

日本語指導を必要とする生徒への指導を充実させるには、学校設定科目等における日本語指導の充実はもちろん、各教科の授業における指導体制の充実も重要であるとの意見が出された。そこで、各教科の授業における生徒の実態を把握するため、生徒、教科担当、HR担任、教育相談員等に聞き取り調査を行った。

本校では、日本語能力の低さから授業内容をほとんど理解できていない生徒や、どの程度まで理解できているのかを自分自身で把握できていない生徒が多く在籍しているのが現状である。これに対して、教員はワークシートや板書、考査問題等の漢字にふりがなをつけたり、生徒本人が発言する場を設けたりすること等で対応しているが、中学校で学ぶべき内容が十分習得されていない不登校経験者等も多く在籍しているため、指導に苦慮している。

今年度は、各教科の授業改善まで踏み込むことはできなかったが、職員間の会話の中に日本語指導を必要とする生徒に関する話題が出るようになってきた。このように職員への動機づけはできたと考えられる。今後は、教科指導の中で生徒が日本語を習得するといった視点から、教員が行っている授業の工夫や配慮事項を全職員で共有するとともに、教科指導の在り方等について検討していく予定である。

【次年度の取組予定】

- 各教員が行っている工夫点の集約と共有化
- 実習を伴う専門教科（工業科）における配慮事項等の検討
- 問題点を議論する場の設定

5 多文化理解教育の充実

各学校では日本語指導を必要とする生徒同士でコミュニティを作ってしまうことで、日本人とコミュニケーションをとる機会が少なくなってしまうといった課題がある。そこで生徒の自己肯定感を高めるとともに、日本人との交流を推進することを目的に、千葉県立生浜高等学校において、母国の文化等について発表する取組を実施した。

第56回千葉県高等学校定時制通信制総合文化大会や文化祭（第41回しほた祭）、日本語基礎の授業内で、母国の文化を発表する機会を設けたところ、次のような効果があった。

- 滞日期間が長くなった生徒が母国について再認識する機会となった。
- プレゼンテーションを作成する段階で、日本人生徒が原稿の添削をするなど、新たなコミュニケーションの場を作ることができた。

このような取組を継続的に実施することで、校内の異文化理解は更に進展していくと思われる。

【次年度の取組予定】

- 日本人生徒との更なる交流の推進

6 専門家による研修会の実施

日本語指導を必要とする生徒に対する指導を充実させるには、指導に当たる教員の資質・能力を向上させる必要がある。そこで、千葉県立市川工業高等学校と千葉県立生浜高等学校で、千葉大学名誉教授国際未来教育基幹の新倉涼子先生を講師とした教員研修会を実施した。研修会では、千葉県における在留外国人をめぐる状況や高等学校での学習支援の在り方、思考の発達と言語習得等について専門的な見地から講義していただいた。日本語指導の専門知識をもたない教員が教科指導を充実させるには、個々の教員が持つノウハウに頼るのではなく、着目すべきポイントを明確にしておく必要があると考えられた。また、生徒の個人情報取得や管理に関するガイドラインの必要性が話題となった。

【次年度の取組予定】

- 継続的な研修会の実施

添付資料 1

<授業等で工夫していることなどありましたら、教えてください>

2. ホームルームにおいて <気づいたこと、困っていることなど>

<ホームルーム、学年等で工夫していること>

3. その他の場面において <気づいたこと、困っていることなど>

4. 学校全体への要望などありましたら、お書きください

差し支えなければご記入下さい。

先生のお名前 _____

ご協力ありがとうございました。

せいと 生徒へのアンケート

にほんごがくしゅう がっこうせいかつ おし
日本語学習と学校生活について、教えてください。

なまえ 名前 _____

おとこ 男 M おんな 女 F

ねんせい 年生 日本へ来た年齢： _____ 才 らいち ひづけ 来日の日付 _____

日本生まれ (1. はい 2. いいえ)

1. にほんごりょく 日本語力について

① 簡単なことは話せますか (1. はい 2. いいえ)

② 自分の思ったことが話せますか

ぜんぜん話せない	あまり話せない	だいたい話せる	話せる
----------	---------	---------	-----

③ 授業で先生の言ったことがわかりますか

ぜんぜんわからない	あまりわからない	だいたいわかる	とてもよくわかる
-----------	----------	---------	----------

③ 学校の教科書が読めますか

ぜんぜん読めない	あまり読めない	だいたい読める	読める
----------	---------	---------	-----

④ 日本語で作文が書けますか

ぜんぜん書けない	あまり書けない	だいたい書ける	書ける
----------	---------	---------	-----

2. ほごりょく (自分の国の言葉) について

① 簡単なことは話せますか (1. はい 2. いいえ)

② 自分の思ったことが話せますか

ぜんぜん話せない	あまり話せない	だいたい話せる	話せる
----------	---------	---------	-----

③ 自分の国の学校の教科書が読めますか

ぜんぜん読めない	あまり読めない	だいたい読める	読める
----------	---------	---------	-----

④ 母語で作文書くことができますか

ぜんぜん書けない	あまり書けない	だいたい書ける	書ける
----------	---------	---------	-----

3. かぞくとはな なにご 家族と話すときは何語ですか

① お母さん (1. にほんご 2. 自分の国の言葉 3. 両方)

② お父さん (1. にほんご 2. 自分の国の言葉 3. 両方)

③ 兄弟 (1. にほんご 2. 自分の国の言葉 3. 両方)

4. 勉強するときは何語ですか (1. にほんご 2. 自分の国の言葉 3. 両方)

(理由 _____)

5. 母語の勉強をしていますか (1. はい 2. いいえ)

* 「はい」 の人はいつ、どこで勉強をしていますか ()

6. 学校生活について

① 学校生活は楽しいですか (1. はい 2. いいえ)

(理由)

② 得意な科目は何ですか ()

③ 苦手な科目は何ですか ()

④ クラブ活動 (部活) に入っていますか (1. はい <部> 2. いいえ)

⑤ 週末や放課後は何をしますか

()

7. 自分の国に帰りたいと思ったことがありますか (1. はい 2. いいえ)

(理由)

8. 学校を卒業したら、何をしますか。

9. あなたの夢は何ですか

10. どこで夢を実現したいですか (理由も書いてください)

11. 日本語の授業で、学習したいことについて希望があれば記入してください

生徒へのアンケート

氏名 ()

ていつうそうごうぶんかたいかい
定通総合文化大会へ参加したことについて質問します。

1. 定通文化大会で発表することを、家族につたえた。
はい (誰に) いいえ

「はい」の人は、家族はそのことについて、何か言いましたか。
()

2. 定通文化大会で母語で発表するのは大変だった。
はい いいえ

() ()

3. 定通文化大会で日本語で発表するのは大変だった。
はい いいえ

() ()

4. 定通文化大会で、自分の出身国の話をしてよかった。
はい いいえ

() ()

5. 今回の発表で、練習は十分にできた。

十分できた	だいたいできた	あまりできなかった	全然できなかった
-------	---------	-----------	----------

()

添付資料 3

6. 今回の発表で、自分のパフォーマンス（出来栄え・できたかどうか）について。

とても良かった	だいたい良かった	あまり良くなかった	全然よくなかった
---------	----------	-----------	----------

()

7. 定通文化大会で発表したことは、日本語の勉強になった。

はい

いいえ

() ()

8. 今回の発表で反省すること

()

9. 今回の発表で良かったこと

()

10. 定通文化大会で発表した感想を書いてください。

⇒レポート用紙

生徒へのアンケート

氏名 ()

日本語基礎の授業で「私の国」の発表をしたことについて質問します。

1. 定通文化大会の発表と比べてどうでしたか。

とても良かった	少し良かった	変わらなかった	少し悪かった	とても悪かった
---------	--------	---------	--------	---------

2. どこが、そう思いましたか。なぜ、そう思いましたか。理由を書いてください。

()

3. 友だちの発表はどうでしたか。

とても良かった	少し良かった	変わらなかった	少し悪かった	とても悪かった
---------	--------	---------	--------	---------

4. どこが、そう思いましたか。なぜ、そう思いましたか。理由を書いてください。

()

添付資料 4

5. 友達の発表を聞いて、分かったことを書いてください。

① 国名 ()

② 何について発表しましたか。



③ 発表した内容について、もっと知りたかったこと、聞いたかったことは何ですか。



④ 発表した内容について、どう思いましたか。



平成30年度 文部科学省委託事業

「高等学校における次世代の学習ニーズを踏まえた指導の充実事業」

研究1年目の実施報告書

定時制高等学校における日本語指導を必要とする生徒への支援体制の構築

(個に応じた日本語指導の充実に向けた学校の教育力の向上)

平成31年3月発行

千葉県教育庁教育振興部学習指導課

〒260-8662 千葉市中央区市場町1番1号